

地方と都市を結ぶホットライン・マガジン

# DePOLA

でほら

26

2004年  
春夏号

## 特集 日本の森林を育てる 地域とフォレストワーカーの新たな取り組み



宝くじ

本誌は、宝くじの普及宣伝事業として作成されたものです。

# 日本の森林を育てる——地域とフォレストワーカーの新たな取り組み 特集企画に寄せて

FOREST WORKER(森で働く人)

## 森

は地球に住むあらゆる生物、植物たちが  
のかけがえのない揺りかご。森林の恵  
みが地球上のいのちあるものを支えている。  
私たちが吸っている空気は森林の緑がもたら  
してくれたものだし、美味しい水や海の幸も  
山からの贈り物。住まいや家具、紙、…そし  
て地球が何億年の歳月の中で造り上げた石油、  
石炭、金銀銅などの鉱物も豊かな森の木と生  
物が蓄積して結晶した貴重な贈り物である。

そのかけがえのない森林が、いま大きな危  
機に直面している。

森林の消失は地球レベルで見ると凄まじ  
く、熱帯地域やアジア各地はもとより、シベ  
リア地方などの亜寒帯の森林も開発やそれに  
伴う気候の変化などで絶滅し続けており、世  
界の森は原始の時代の頃の62%が消失した  
(世界自然保護基金)。また国連食糧農業機関  
(FAO)の最近の調査によると、森林面積  
は1990年の39・6億haが2000年には  
38・7億haに減少、毎年4万種の野生生物が  
絶滅していると発表している。これは日本列  
島の約2・5倍に当たる森が10年間で絶滅  
し、同時に森や川に住む貴重な生物の命が地  
上から消えていることになる。

## 日

本の場合はどうか。日本は世界的に  
見ても豊かな森林の国。実に3分の  
2が森林で覆われている。火山や地震、斜面  
に人家や耕作地の多い日本列島にとって、森  
の緑は土砂等の災害を防ぎ、水を蓄え、海に  
栄養分のある水を供給する、国土の核となる  
貴重な存在である。日本は森林文化の国、つ  
まり木の文化が生活から日本人の精神風土に  
も深く関わってきている国だと言える。

その日本の森林を守り育ててきたのは山村、  
現在過疎地域といわれる町村の人々である。  
都市に水や木材等を提供するために過酷な山  
仕事を黙々と続けてきた。戦時中は飛行機や  
船にも木材が使われ、戦後丸裸になった山に

国策としてスギ、ヒノキの植林が行われた時、  
現在では不可能と思われる急斜面や溪谷に命  
がけて植林したのも山村の人々だった。

スギやヒノキの人工林は常に手入れが必要  
である。日本が工業大国となり経済優先の社  
会になってから、日本人の多くが森林と山里  
を見放したが、山と共に暮らしてきた人々は  
森林を守ることに努力してきた。

しかし、地元の木を使って家を建てるとい  
う風習に代わって合板やモルタル住宅が普  
及、さらに外国から木材が輸入されるようにな  
り木材価格が下落、スギ立木1立方mは1  
980年に2万2700円だったものが現在  
では7050円、これを人件費で見ると、ス  
ギ林1立方mで12人の人件費が見込めたもの  
が現在は0・6人分にしかならなくなった。

そのために山仕事が続けられなくなり、間伐  
をしない山、伐採後植林をしない山が約70%  
になり、伐採しても運び出すと大赤字になっ  
てしまうため、放置される材木も増えている。

林業で生活してきた山村は人口が減少し、  
その担い手の高齢化が進んでいる。林業に就  
いている人は30年前の3分の1以下になり、  
29%が高齢者。また代々山林管理してきた森  
林所有者たちが村を出ていったため、森は手  
入れされず連絡もとれないケースも増えてい  
る。(全国林業組合連合会)。我が国が古代よ  
り育んできた独自の森林文化も失われようと  
している。

## 地

球温暖化が深刻化している今日、森  
林の回復・育成が最も重要であるこ  
とを世界の人も日本の人々も気がつきはじめ  
た。1992年に開催された地球サミットで  
は森林の消滅が世界の環境悪化を招いてお  
り、持続的な森林経営を求めざるを得ない決  
議、97年に京都で開催された国際会議では、大気  
中の二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)の増加が地球温暖化や  
異常気象を招いており、日本政府も「CO<sub>2</sub>排出

量を6%削減する」、そのためにCO<sub>2</sub>の吸収源  
である森を守り育てることを世界に向けて発  
表した。

この「京都議定書」を受けて、平成13年度  
に「森林・林業基本計画」が新たに策定され、  
森林の持つ様々な機能を発揮するため、森林  
の恩恵を受けている国民が協力して森を守り  
育てること、森林を「水土保全林」「森林と  
人の共生林」「資源の循環利用林」の3つに  
区分し、そのために必要な整備を着実に実施  
し、管理経営していくことを定めた。

「緑の雇用事業」は、森で働く人を確保、育  
成していくために国も協力していくという試  
み。「山で働かないか」という呼びかけに都  
市からの反響も大きく、森林労働を希望する  
若い世代が少しずつ増えている。彼等の来村  
を地域は歓迎し、また頑張ろうと思うようにな  
った。暗く荒れていた森に太陽が射し込み  
爽やかな風が少しずつ吹きはじめている。

## 本

誌では「森」の必要性や魅力につい  
て語る予定だったが、いま森林の育  
成と保全が緊急課題で、担い手の不足が深刻  
であることから、森林作業員を確保して独自  
の方法で林業の振興に取り組んでいる町村  
や、「緑の雇用事業」でE・Uターンして山  
仕事に就労した人たちを中心に取材することに  
した。一方で、森林の破壊はたやすいが再  
生には長い時間が必要なこと、豊かな森林に  
溢れる極上の空気と安らぎ、木々の持つエネ  
ルギーの素晴らしさ、生き物たちの共生など  
も改めて実感した。

森の再生には長い年月が必要だが、いま大  
切なことは、私たち一人ひとりが木のぬくも  
りにふれ、心の中にも「木を植える」ことで  
はないかと思う。

「てぼら」編集部

(財)過疎地域問題調査会

「日本の森林を育てる——地域とフォレストワーカーの新たな取り組み」  
特集企画に寄せて—— 2



## ■紀州木の国の森林と地域を元気に

- ・環境保全で新たな雇用を創出する  
和歌山県「緑の雇用事業」「新ふるさと創り」—— 4
- ・ユニチカユニオンが林業を通じて交流  
備長炭の里 和歌山県中津村—— 5
- ・資格を取ってグリーンキーパーに  
地区の学校も祭りも息を吹き替えした  
和歌山県美山村—— 7
- ・熊野の森林を環境教育の場に  
歴史と自然の豊かな熊野で働く  
和歌山県熊野川町—— 10

## ■元気な森の担い手がいる山仕事の先進地

フォレストファイターズ

- ・森林は[森の勇者たち]が保全する  
美しい森と清流が村づくりの活性剤  
三重県宮川村—— 12
- ・「俺たちの村 諸塚」  
山仕事も里仕事も(財)ウッドピア諸塚で  
宮崎県諸塚村—— 16
- ・下北半島の自然と共生する森づくり  
恐山山地森林生態系保護林、大畑ヒバ天然林—— 20



## エッセイ

“鎮守の森”を復活してふるさと再生  
**一村一森運動**

宮脇 昭 (イラスト/松田けんじ)—— 24

## ■森を学習・交流の場に

- ・東京の森を、元気に。  
都民ボランティアが山仕事をサポート  
東京都奥多摩町—— 28
- ・足尾銅山「公害の原点」から「環境共生の発信地」へ  
栃木県足尾町—— 31



## 表紙 写真

左上/枝打ち作業をするグリーンキーパー(和歌山県美山村)  
左下/足尾銅山「緑を育てる会」の植樹作業(栃木県足尾町)  
右上/間伐したヒノキを自然乾燥する(宮崎県諸塚村)  
右下/下北半島、ヒバと広葉樹の混交林と北限のニホンザル



## INFORMATION —— 35

北限のブナ自生林「歌オブナ林」(北海道黒松内町) / 「森を貸します」(福島県只見町たもかく) / 林業で働きたい人は各県の林業労働力確保支援センターへ / フェアに参加して情報を / 木や間伐材を活用しよう  
・(財)過疎地域問題調査会からのお知らせ  
・編集後記/奥付

## もくじ 写真(上から)

山仕事の七つ道具を身につけて(和歌山県熊野川町) / 森と清流が美しい三重県宮川村 / 鎮守の森の復活を(イラスト) / 都民ボランティアが山仕事(奥多摩町)

「緑の雇用事業」を国に強く提言してきた和歌山県が、全国に先がけて積極的に動きだしている。和歌山県独自の制度と運動させてI・Uターンの若い世代を林業の担い手として研修・採用し、市町村の現場へ。スタートした平成14年度で133名がIターン、123名が山村の現場で森林作業に従事、他の10名も製炭等に従事した。これらの新規就労者は今後も森林作業員として働くことを希望し、103世帯151名がすでに現場の町村での定住をめざしている(平成15年)。県がめざす「新ふるさと創り」とも連動し、地域に活気が出て来た。

全国のモデルとして県と市町村、地域が一体になって取り組む緑の雇用事業を中津村、美山村、熊野川町の現場で取材した。



## 紀州木の国の森林と地域を元気に

### 環境保全で新たな雇用を創出する 和歌山県「緑の雇用事業」新ふるさと創り

和歌山県は古くから「紀州木の国」といわれてきたように、温暖多雨の気候を生かして林業が盛んで、県土の77%が森林で占められている。林家や地域の人々が代々守り続けてきた紀州美林だが、高齢化・過疎化で整備が進まず、地域の活力低下が深刻化してきた。

森林の荒廃は、地域経済の衰退だけではなく、水資源や国土保全、動植物等の生態系を悪化し、地球温暖化の大きな要因にもなる。

和歌山県は平成13年に改正された森林・林業基本法(従来の木材生産主体の政策から、森林の多面的な機能を持続的発揮を図る)にあわせ、森林を育成していく人たを広く一般から雇用する「緑の雇用事業」制度を国に働きかけてきた。その結果、農林水産省、総務省が「緑の担い手育成対策」、厚生労働省が「緊急雇用対策」として期間を限って予算化した。すでに準備万端の体制を組んでいた和歌山県は、平成14年4月に県庁内に緑の雇用推進局新ふるさと推進課を設置、各市町村と連携しながら直ちに行動を開始した。

森林や自然環境を保全する人材の確保という新たな雇用が生まれたことにより、森林の整備や育成が進み、都市などから若い世代が来て定住してくれることで地域に活力が蘇ってくる。これが和歌山県めざす「新ふるさと創り」。平成14年から全国に先がけてスタート、担当

者たちの日夜を通しての準備や広報活動等により、「緑の雇用」に全国から予想をはるかに超える人々が応募してきた。15年



▲和歌山県緑の雇用推進局の泉さん(左)、中野さん

と東京で開催した合同説明会には511名の人が参加、168名が採用された。平成14年から15年夏までに、緑の雇用事業や森林組合が直接採用した104名を加えると、15年夏までに375名が森林の担い手として従事し、うちIターンした人271名が定住して頑張っている。「和歌山から日本を変える」という取組みは全国から「和歌山方式」として注目されている。

取材には、緑の雇用推進局定住促進課・中野雅光課長、新ふるさと推進課・泉清久主査が同行してくれた。当初から担当してきた二人は、地域のことや採用した若者のこと、住居のことまで何もかもよく知り尽くしており、地域の担当者たちの信頼も厚く頼りにされている。いまだきこのような熱血役人があるのかと我々も感動しながら、2日間様々なことを学ぶことが出来た。

# ユニチカユニオンが 林業を通じて交流

備長炭の里 なかつむら  
和歌山県中津村



ユニチカユニオンの森を案内してくれた中家課長 植樹1年目のコナラ(下)

中津村(人口2506人)は和歌山県のほぼ中央部にあり、南に標高4000~7500m級の山々が連なる平均標高4000mの山間地帯。日高川とその支流がV渓谷を形成し、流

域に集落と田畑が点在している。山林は7819ha(89・7%)、林業が盛んで、良質な備長炭の里として古い歴史と実績を誇っている。

この中津村に大阪に本社があるUIゼンセン同盟ユニチカ労働組合「ユニチカユニオン」が森林整備活動に当たる。企業の森が平成14年に設置された。比較的集落に近い場所にある民有林2ヶ所で、面積は2・11ha。ユニチカユニオンが所有者から山林を貸り受け(当面20年間)、森づくりを進める。

中津村とユニチカユニオンとの出会いは、県が大阪市内で開催した「緑の雇用事業」説明会にユニチカユニオンの松本書記長が参加、中津村笹村長の村をPRする話に心動かされたことによる。ユニチカでは組合の創立30周年事業の企画を考えていたところで、環境保全と組合員の癒しの場づくりをしたいと中津村を訪れた。自然も村人も大変気に入ってきたが、同時に山と林業の深刻な状況も知り、微力ながら助けになりたいと松本書記長当時(は思ったと言っ)。

平成14年6月に事業地として中津村を決定、夏には関係者が候補地の森を視察し、同年10月にユニチカユニオンと中津村が契約した。専門的技術を要する森林施業や日常の管理は森林組合に委託し、年数回組合員と家族等が来村して植林や下草刈りをしている。

役場林政課中家哲課長の案内でユニチカの森の一つを訪ねた。幹線道路から林道に入ると一気に坂道になり、間もなく見晴しのよいその場所に到着した。今はほとんど高い樹木がない場所なので、下の方に道路や河川が見える。もとは地主が天王寺動物園の依頼を受けて、コアラが食用するユーカリを栽培していたが、需要がなくなつたため伐採、そのままにしておくのはよくないと思つていた時

ユニチカユニオンに貸出す話が舞い込んだ。

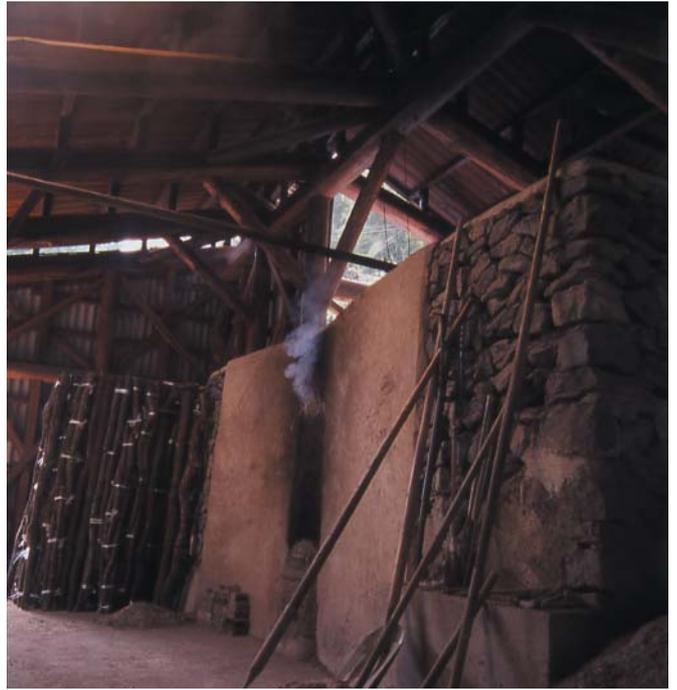
「急斜面の森が多い中津の中ではここは緩やかな斜面ですから素人でも作業しやすい森です。事業は昨年からはじめたのですが、ユニチカユニオンの人たちは秋までに5回、約120名が来られ、植林や下草刈りをしています。2泊3日で来村、地域おこしのグループ「ゆめ倶楽部21」が企画する、炭焼きやわらじ作り等も体験してもらつて交流を図っています」と中家課長から説明があつた。

道路に近い場所には植樹されたクヌギ、コナラ等の苗木がしっかりと根付き紅葉などしている。名札が付いているので聞いたら、ユニチカの社長や重役たちがこの活動に賛同し、寄付というかたちで植樹したものだという。植樹計画では広葉樹と針葉樹の森づくりを予定しているが、視察現地にはユーカリやツバキの木も何本か自生しており、楽しい林になりそう。「ここで木を植えた人や子供達とときどき訪ねてくれて住民と交流してくれるのが私どもの願いです」

春にはワラビやゼンマイなどの山菜の宝庫だそう、近くの山林には組合員が種菌した椎茸のほだ木が沢山置かれていた。下の方から吹き上げてくる川風が心地いい。

## 紀州備長炭のPRと研修生の育成 製炭技術研修所

村の中心に村が設置した備長炭の研修工房がある。外見は目立たない建物だが、中へ入ると石を丁寧に積み上げて造つた本格的な窯が2個あり、作業しやすい広々とした土間、炭火と煙りが高く立ちこめてもよいように作られた高い天井等、大変よくできた作業場である。一つの窯の火焚口からは穏やかな白い煙りが上がり、ウバメガシの炭化も真近と思われる。この研修所は炭の中でも最も高級な



▶製炭技術研修所の内部(上)指導員湯上さんと研修生小野さん(右) 同所で製造された高級備長炭、焼くと原木は約半分に凝縮する  
◀窯の手入れをする小野さん(上)ウバメガシを整えて束にするのも熟練が必要



白炭(紀州備長炭)を製造しており、炭化が終わると窯口を徐々に開けて空気を送り込み1000℃の中で真っ赤に燃やす精錬(ねらし)という作業、そして真っ赤に燃えた炭を外へかき出して灰と土をかける緊迫した作業が待っている。いまはその前のちょっと一息つける時間。

同工房では、担い手育成を目的に研修生を受入れ1年間かけて製炭者として独立できるように指導している。指導に当たっているのは湯上昇さん。親の代から備長炭一筋で腕前と指導力が見込まれて、ここで炭作りをしながら後継者の指導に当たることになった。

今年の研修生は小野昌好さん(50)。大阪でのサラリーマン生活を辞めて応募、7月のテスト期間を経て8月から研修生になった。「祖父が兵庫県の田舎で炭焼きをしていて小さい時手伝ったのが忘れられず、職安で研修生を募集しているのを知り応募しました。原木伐りなどはハードですが興味は尽きず充実しています。備長炭作りのいい職人になることが夢です」と汗に灰のついた顔が微笑む。

宿泊施設はあるが、生活費は本人負担ときびしいが、湯上さんが小遣い程度は面倒みてくれるらしい。

研修生は小野さんで5人目。卒業した3人は村に残って、地元製炭者の協力を得て、自分で工房を作り、みな独立しているという。

中津村では、古くから紀州備長炭の製造に取り組んでいるが、原木のウバメガシの採取できる山が少なくなり、今では他所の山から伐り出してくることが多い。「もともとウバメガシは海岸に近い方に自生しています。原木を購入する方法もありますが、それでは採算が合わない。紀州の白炭は末端価格で15kg1万5000円もするようですが、中間業者が儲かっているだけで、我々はやっと経営しています」と湯上さん。高齢化して辞めていく人も多くなったので、何とか後継者を育てたいと指導を引き受けた。

学校から子供達がよく見学に来る。火を見る時、鉄のように硬い炭がキーンと鳴る時、子供達は顔を輝やかせ感動する。湯上さんが子供のために備長炭でつくった木琴(炭琴)や壁に張り出した説明用のイラスト等が印象的だ。

段ボールに入れて出荷する前の備長炭を見せてもらう。炭の灰を落とすと黒々とした鉄のような肌が現われ、切り口は磨き込まれた鋼のようだが、気泡が無数にあり、浄化用やインテリアとして人気があることに改めて納得。小さな破片も宝物のように見える備長炭だが、製炭現場の厳しさも垣間見た思いである。

小野さんは「難しいですね、もっと早くできない」と言いながら、曲ったウバメガシの原木に切り込みを入れて真直ぐにする作業に取り組んでいた。

・中津村林政課 ☎0738(54)0321

# 資格を取ってグリーンキーパーに

地区の学校も祭りも息を吹き替えした—— 和歌山県美山村 みやまむら

「緑の雇用事業」で美山村へ来た新規就労者が次にめざすのは、森林作業のプロフェッショナル集団「グリーンキーパー」。平成7年に住民の声を反映して、村と森林組合が主体でスタートした制度で現在18名が従事し、緑の雇用制度等で入村してきた新人たちの指導にも当たっている。清流沿いの集落には洒落た一戸建て住宅や単身者用マンションも出て、子供たちの元気な声も山々にもこだましていた。

## 広大な森を若衆で整備する グリーンキーパー支援制度の設置

中津川村に隣接する美山村は、日高川の中流域に位置し、県下最大の椿山ダムが村の中央部にある。総面積は1万6862haと広大で、94%が森林。その森林の60%、8838haがスギ、ヒノキ等の人工林であるため、森林組合が中心に早くから民有林の保全・整備に当たってきたが、過疎化と高齢化で、新たな作業員の育成・確保が求められていた。人口は椿山ダムの完成(昭和63年)で集落が水没して村外へ移住した人が多く、以来減少がすすみ、現在2238人、高齢化率も40.6%となり県内でもかなり高い町村になっている。そんな中、住民組織である産業振興会議の林業部会からの提案が契機となり、平成7年に「グリーンキーパー支援事業」が設置された。森林組合が新規に採用する作業員に、給与や諸手当、福利厚生費を2年間2分の1助成するとともに、毎年3名ずつ新規の作業員を採用して、10年間で30名のグリーンキーパーを採用しようというもの。

新規採用したグリーンキーパーは現在18名となり、平均年齢は今までは59歳であったのが35歳と大幅に若返った。「ダムで村外へ出た人が村で働きたいとウタ

ーンしてきてくれて嬉しかったですね。そこへさらに県のすすめる『緑の雇用制度』の活用で、新規就労してきた人が14名加わり、現在40名が山仕事に従事しています」と役員農林振興課朝間一行課長から説明があった。

## 急斜面で枝打ち作業

森林組合下西千秋参事の案内で、グリーンキーパーの作業班が間伐作業をしている山を訪ねた。寒川財産区といわれる山で、森林作



▲朝間美山村農林振興課長(左)と下西森林組合参事  
▶寒川財産区の山林で枝打ち作業をする森林作業員の皆さん

高いところでの軽便なハシゴに降って技打ち作業をするグリーンキーパーたち



なるグリーンキーパーで、班長として皆の指導に当たっており「かみさんとここでの生活を楽しんでいます」と言う。

この日作業しているのは、地元出身の森口康浩さん(23)と小玉勝利さん(51)、近隣町村から就労した中井善伸さん(60)、清水信明さん(45)、多田勝さん(40)の6名。他の班はもっと奥の山

中で間伐作業に従事しているとのこと。

都市の企業で働いてきた人にとって、山仕事は重労働で月給もその割には高くない(平均25万円)が、自然や山が好きでこの仕事を選んだ人が多く、家族との会話が増えた、子供が学校生活を楽しんでいる、休日の趣味が増えた等、田舎での暮らしに満足している。美山村の人々の誠実さや暖かさも大きな要因のようで、「美山は人と自然の理想郷」というグリーンキーパーもいた。

同行した県定住促進課長の中野さんが「みんなとてもきれいな目をしていきますね」と言った言葉が印象的だ。

「美山村の緑の雇用事業による採用では、ウターンが6名、エターンが8名あり、一年間研修するとグリーンキーパーの資格を取得することが出来ます。上富田町にある県の研修施設に年間75日通って森林管理に必要な理論や実習を学ぶもので、これにパスすると美山村のグリーンキーパーとして月給制、休暇、各種保険のある正社員になります。山仕事は始めは新人の指導にも当たります。山仕事は始めは

きついでしようが、じきに慣れます。ぜひ正社員になって村に定住して欲しいと支援しているところですよ」と下西参事は言う。14年から研修にきた人の中ですでに2人がグリーンキーパーの資格を取得したという。

### 48人の新住民を迎えて 寒川地区が元気を取り戻した

グリーンキーパーや研修生の住まいがある寒川地区へ向かう途中の山麓に名水が流れ出ることで知られる場所があった。小さな木造の東屋が建っていて、何と「癒しの駅・長寿庵」という看板が架けられている。手作りの椅子も用意された休憩所になっていて、壁には地区の人の活動や訪ねてきた人が送ってきた写真などが張られある。感心して見ていると地区のお年寄りが近付いてきて「空のペットボトルを用意しているからお水を持っていけや」と言う。

この東屋は地区の有志が作ったもので、毎日の掃除と美化をお年寄りたちが交代でして



「癒しの駅・長寿庵」の名水所



▲寒川(そうかわ)地区に建設された定住促進住宅、単身者用住宅  
 ◀保育園が終わってとび出してきた子供たち。半数が、1ターンしてきた子供

いるらしい。山で作業する人たちがここで一服して名水を持ち帰って欲しいという配慮もあるのだろう、美山村の人々の暖かさともアセスにふれた思いである。

日高川の支流・寒川の清流沿いにある集落が古い歴史を持つ寒川地区で、川沿いにお洒落な1戸建て住宅が並びニュータウンを形成している。上の方には小学校や単身者用住宅もあり、森林組合の事務所もここにある。中には民間の賃貸住宅がないためグリーンキーパー制度の設置と共に住宅建設を県の補助事業で行ってきた。3DKの定住促進住宅は毎年平均3戸建設し、現在23戸、単身用はワンルーム12室があり、さらに4戸の1戸建てを建築中だ。

ちょうど保育園が終了した時間で、子供たちが一斉に飛び出してきた。近くのお母さんは「病気がちだった下の子供がここへ来てからは風邪ひとつひかなくなり、上の姉も先生がマンツーマンで教えてくれるので小学校へ行くのがとても楽しいようです。子育ての環境としても最高ですよ」と言う。

山仕事は朝早い代わりに夕方まで4時頃に終わるので、保育園へお迎えに来るお父さんもあるようだ。

別のお母さんは「主人と家庭菜園や釣りを楽しみ、家族そろって

夕食できることが魅力です」と言っていた。

役場の朝間課長は「グリーンキーパーは家族を入れると48人で、村にとって新住民は大切な財産です。複式学級寸前の小学校が普通学級で維持でき、保育園も元気になりました。寒川神社には県指定無形文化財の獅子舞などがあり、その継承に苦勞していましたが、若いお父さんたちが熱心に取り組んでくれます」

保育園は地区の集会所として使われていた施設を改装したもので、地区の人たちも協力して用意した愛情たつぶりの遊具用品やテーブル、棚などが並んでいる。

今後は入村者の住宅を寒川地区に限定せず、別の地域にも建設したり、古い民家に住みたいという要望の人には空家も斡旋していきたいと言う。

また、美山村の人と自然の共生関係を再構築するという取り組みは、環境保全型林業グリーンコンシューマーの先進地として県・国も注目しており、今後は青少年等の森林体験や研修生の受け入れを行っていく計画だ。

美山村は、5月には広大な日高川ダム湖畔を横切って泳ぐ鯉のぼりが有名で、周辺はカヌー、ジョギング、釣り等のスポーツのメッカで、山間には癒し効果に優れているという「美山温泉」もある。

「遊ぼうよ」という寒川の子供たちに「春になったら鯉のぼりを見に来るからね」と約束、元気で大らかな姿に後髪を惹かれながら、紅葉の里を後にした。

・美山村農林振興課 ☎0738(56)0321  
 ・美山村森林組合 ☎0738(58)0014

# 熊野の森林を環境教育の場に

歴史と自然の豊かな熊野で働く——和歌山くまのがわちよう県熊野川町



古くから現世浄土を求めて多くの人々が参詣した熊野。木の国紀州の木材は熊野川にいかだを組んで輸送し、熊野川町はその集積地として賑わった。スギ、ヒノキの美林の中には熊野古道などの史跡が点在しており、歴史口マンと壮大な自然に魅せられて山仕事をしたいと都市から多くの若い世代がやってくる。また森林環境教育の場として、中学生や大学生の林業体験教室が実施されている町でもある。

## 広大な森林地帯

古代より信仰の場として修験者が山岳修業を行い、また京・奈良・伊勢・紀州を結ぶ観光の道として発展してきた熊野古道。熊野地方は気温が高く雨が多い風土であるため、樹木の成長が良く、林業地帯として発展してきた。切り出したスギやヒノキは熊野川やその支流からいかだで海辺の町新宮へ運ばれて選別加工され、さらに海運で全国へ運ばれていった。

熊野川町(人口2081人)はその中継地点で、熊野川が最も壮大で美しいところ。今は木材問屋を営む家は減り、本宮町の熊野本宮大社や湯の峰温泉、川湯温泉への観光客が通過する町になっている。私もそんな一人で、道の駅で休憩したり熊野川に降りて遊んだことはあるが、町が北西部にかけて広大な森林を持ち、赤木川や和田

川沿いには修験道の歴史を持つ集落や史跡が点在していることを知らなかった。熊野古道はそんな町の森林地帯の中を東北に、熊野那智大社と熊野本宮大社を結んでいる道。さらに熊野川町の北部は、

熊野川を渡って奈良県の県境、十津川村と接し、湍峡近くには飛び地まである。

総面積は1万7547ha、その95%が森林で、ほとんどが民有林。昔から大規模林業家が多く、明治や大正時代に植えられたスギやヒノキの巨木が大切に保存され、天然の美林を形成している。

## 首都圏から山好き夫婦も移住

熊野川町森林組合事務所は熊野川に添って走る国道168号の道沿いにあり、隣には道の駅がある。もともとは「杉っ子」と称する森林センターが製造する林産物の展示販売所として平成6年にオープンしたもので、後に施設を広げて食べ物や休憩所のある道の駅になったという。香りのよいスギ、ヒノキやケヤキ、クリ材等の盆や器、家具調度品が並んでいるなかに熊野スギで作った品のよい箸があった。

これから森林作業員が働く山へ案内してくれるという田中多喜夫参事がやってきて、「この箸は組合の加工所で作る最後の品です。東南アジアから安い箸が輸入されるので採算が合わないんです。輸入の箸は防除剤漬けになっているのでよくないんですがね」と言う。森林組合が間伐材の活用と熊野の木のPR、高齢者の雇用の場にと生産してきたが、ついに廃業に追い込まれることになったという。

さて、クルマに乗って林道を蛇行しながら登っていくと、目の前に「鼻白の滝」が現われた。樹木の中に真っ白に輝いて落下している二筋の滝、遠くなのに轟音が聞こえてくる。滝を通して山々を眺めると、かなりの急斜面であることに気がついた。

若者たちが働く山も急斜面で、スギを切ったあとの見晴しのよい山が空まで続いている。

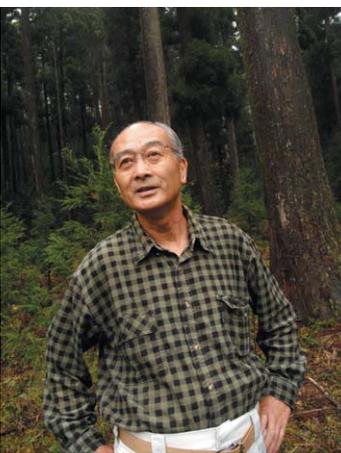
人影が見えないのは、山のてっぺんの向こう側で作業しているからで、私も途中まで登ることにした。山へ入る作業員が足場を確保するために石や丸太を置いて歩きやすくしている。

山へ来る途中、田中参事が森林組合で採用している新規就労者について説明してくれた。

それによれば熊野川町では、緑の雇用担い手育成で21名、緊急雇用で18名、合計39名の雇用・研修生を募集しており、うち13名がインターン、26名が地元採用だという。

「結構若い人が多く、県全体の平均年齢が38歳なのに当町では36歳です。主な山仕事は、熊野古道の整備を含めて、いまある針葉樹天然林の育成と間伐して広葉樹の森を整備していくことで、担い手育成雇用の人たちが間伐作業、緊急雇用の人たちが広葉樹の森づくりに従事しています」と田中参事。つまり、担い手雇用の人たちは採用2、3年以上の経験豊かなベテランで、緊急雇用の人たちは1年目の「緑の雇用事業」採用の新人たちということなのだろう。

この急斜面では広葉樹の森林育成をめざしており、10数人が従事している。その中に森林作業をめざして夫婦で働いている人がいるというので、急斜面を登った。



森を案内してくれた田中参事

▶ 山林作業をする人たち。上段右端が淵名さん  
 ▼ 夫婦で山仕事をする響谷さん夫妻



そのご夫婦は響谷直樹さん(37)と妙子さん(37)。埼玉県八潮町で理髪店を経営していたが、田舎暮らしに憧れており、E・Uターンプエアに出かけて和歌山県の緑の雇用事業のことを知った。店をたたみ昨年の9月に移住してきた。「4人の子供がいますが、20歳と18歳の子供は自活できるからと母に頼んで残し、16歳と10歳の娘と一緒に来ました。やっと念願の民家も借りることができ、ここは本当にいいよと言うものだから、来年は母も残った息子たちも来て山仕事したいと言っていますから、7人家族と犬2匹になります」と妙子さん。「紀州熊野は自然

がどこよりも豊かで歴史も古く、近くには温泉も沢山あって最高です」とご主人も言う。二人とも仕事がつらいとは一度も思わない、毎日が充実していて楽しいと笑顔いっぱい語った。「新人ながらバイタリティーに溢れ、若い人のよき相談相手になるでしょう」と田中さんも女性の採用に満足している様子だ。

淵名和明さん(40)は新潟県津南町の出身。農業公社の職員で牧場経営を担当していた。野菜栽培をするのが夢だったので、山仕事に慣れてきたら、家庭菜園を始める他、山仕事をしながらミツバチについても研究を重ね、美味しい蜂蜜を作りたいと語る。町に新しい風を吹き込んでくれそうな頼もしい新住民たちだ。

スギを切った山にはよく見るといろいろの木が生えている。ツバキ、クリ、ユズリ葉、サカキ、ヒノキやスギの実生もある。作業員はこれらの植物を大事に残しながら下草を刈っていた。やがてここは多様な広葉樹の森になるだろう。

### 林業家が育ててきた神秘的森

田中参事が「森林環境教育の場に見学させてもらっているスギの美林があります」とさらに奥地へ案内してくれた。一般に人里離れた山は荒れているケースが多いが、木の国紀州と言われるように、手入れされてきた森が多く、やがて鬱蒼としたスギ・ヒノキの巨木の森が出現した。一台の軽トラックが停まっている、山に調査のために入るといふ会社名を記した紙を貼っている。会社名は浦木家が経営する浦島観光の関連会社。

ここは地元の大規模林業家の一つ、浦木家が代々育成、間伐してきた森で、樹齢100年以上のスギの中に若い樹や実生もバランス

よく育ち、樹自らがつくり出した自然林を形成している。平坦な土地で、太陽も風も通す程よい明るさの中で植物たちが共生しており、青少年が見学する場としても最高だ。森の奥へ入っていくと浦木家が建てた山の神を祭る小さな神社があった。かつての林業家は自然の恵みに感謝しながら木々を育て、神々の宿るところとして敬ってきたのだろう。神秘的で天に届くばかりの巨木には山の神が宿っているように思える。

森林体験教室は県内の中学3年生を対象に1泊2日で行われ、測量から枝打ちまで本格的に作業を体験実習させている。同教室は熊野森林文化国際交流会、熊野森林学習推進協会が実施し、田中参事が理事長等を努めているため、指導で大忙しとなる。昨年で5回目、毎年120名の生徒を受入れており、林業で働きたいという生徒が増えてきたという。

・熊野川森林組合 0735(44)0356

文/浅井登美子 カメラ/小林 恵



浦木家のスギ・ヒノキ林



# 森林は「森の勇者たち」が保全する 美しい森と清流が村づくりの活性剤

三重県 宮川村  
みやがわむら

森林と清流を生かして4つの三セク企業を創設。その一つが若者たちが働く林業会社フォレストファイターズ。彼等が切り出した木は、森林組合経営の工場で木材になり、(株)MSPで住宅建材にカットされて市場へという構想。他に村の木や食材を贅沢に使って観光客に人気の宿泊施設「フォレストピア」や、地域住民が営む食品加工センター、日本一美味しい水の商品化など、自然と共生する村づくりは着々と実を結び、E・Uターンする若い世代が増えている。

## Eターン希望者に人気 フォレストファイターズ

まだ夜が明けきらない晩秋の午前7時前、村の中心部からクルマで約40分の久豆(くす)地区の上流、大杉橋を渡って左手の山道に入った空き地に若者が乗ったクルマが次々に到着してきた。森林作業員・フォレストファイターズの集合場所で、これから1時間30分かけて標高1000mの山に登り、森林の間伐作業を行う。山の上の方から作業するので、現在は往復に時間がかかり、帰りは午後4時頃に1時間かけて下山、作業は2ヶ月はかかるという。

最初に到着したのは細淵清さん(28)。山作業に行くスタイルとは思えない恰好のよさで現われ、ピンクのシャツの上に作業用のチョッキをはおり、山歩きの地下足袋に履き替えた。「僕は村の岩井地区の出身。家が林業農家で父親は今も山で働いています。この仕事は当

然の成りゆきとして選びました。山仕事で食べていけるので助かります」という。

まだ独身、趣味は磯釣り、休日には伊勢湾へクルマを飛ばすと言う。

間もなくフォレストファイターズと描かれたクルマが到着した。昨年(2003年)4月に新規就労してきたEターンの青年たち3名が乗っている。

木下裕一さん(33)は三重県出身の元サラリーマン。本人の希望もあったが、宮川村への移住には奥さんが乗り気だったという。

大野弘策さん(33)、大阪市出身。「ずっと田舎暮らし志向だったので、やっと夢を実現できました」と語り、一戸建ての家を借りて住んでいる。

剣健次さん(32)は愛知県津島市の出身。子



▲地下足袋に履き替えて山へ登る準備。後ろが細淵さん  
▶フォレストファイターズ総務担当の山中さん



供が一人いて、一戸建ての家を借りている。「家賃はファイターズの先輩の仲介もあって2万円から2万5000円ほど。住む環境もよく仕事にも慣れてきたので、今は本当に良かったと充実した毎日です」と言う。

リーダー(班長)は小椋忠さん(32)。「パリの独身と言いたいところだけれど、小学生の子どもいます。村営住宅に住み、親はサラリーマンですが、この会社が出来た時誘われて入社しました。班長としては、安全第一、一日の作業のノルマが決まっているので、遅いグループを協力しあって作業するということです」

この日山頂近くの保安林で作業するメンバーは11人。間伐用の機器は現場に置いてあるので、各々弁当など入れたリュックの軽装に地下足袋、軍手を着用して、足早に山の中に消えていった。多少の雨でも作業は続行するという。

この地区の上には貯水用の宮川ダムがあり、作業する森は個人の所有だが、手入れの遅れている森が多い。特に山の山頂付近の林道から遠い人工林は手入れされておらずフォレストファイターズの若い力が発揮される森である。

フォレストファイターズは、森の勇士たちの意味のネーミングで、平成5年10月に三セクの林業会社として設立した。資本金2000万円は村が1550万円、残りを森林組合、JA、林家20戸が出資、森林作業員の雇用確保・若返りをはかりながら、森林の適正な管理育成を行っている。

社員は当初3名でスタートしたが、毎年2〜5名を新規採用し、現在17名(地元採用7名、Uターン3名、Eターン7名)の3班体制で活動、平均年齢は35・7歳となっている。通年雇用、週休2日制、各種保険にも加入、

研修会等への参加も推進しているので、最近では就労を希望してくる人が大変多くなった。同社の林業活動は、植林、下刈り、除間伐、枝打ちが主であり、公共事業が主要な受注事業である。

事務所は森林組合(株)MSPの工場がある小切畑地区の一角にあり、山中操総務担当が作業の手配や資料づくり、林農家や村長等の対応に追われていた。山中さんも平成8年に松坂市から山仕事をしたいとEターンしてきた一人だが、2年前に総務担当に配属された。

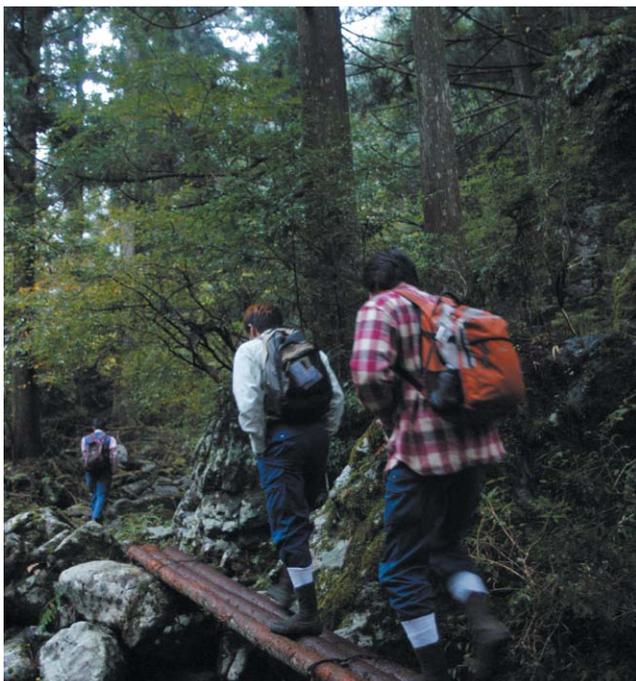
「現在は村有林の施業を中心とした公共事業や補助事業が中心ですが、後継者不足から手入れの遅れた森林を整備するために努力していきたいと思っています。社員はあと数名、20名体制によるプロフェッショナル集団をめざしています。僕も本当はまた山の現場に戻りたいですね」と山中さんは語っていた。

美しい自然環境と山林資源を  
まるとこと地場産業に生かす

宮川村人口3973人は三重県の中西部に位置し、県下で最も広い3万754haの面積を持つ村。森林面積が96%を占め、全域が吉野熊野国立公園、奥伊勢宮川峡県立公園に属し、緑豊かな自然と溪谷美を誇っている。平成3年と14年に国土交通省の一級河川の水質調査で日本一に選ばれた。

尾上武義村長がインタビューに応じてくれるというので役場へ出かけた。10時には津市まで行く過密日程の中、8時には登庁して公務に当たっていた。

「当村には地域の自然環境を生かした特殊法人、三セクの企業が4社あり、10年間に従業員が150人を超えました。フォレストファイターズの場合は県とタイアップして社員を募集していますが、昨年採用した3人の30才



▲ 左から大野さん、班長の小椋さん、剣さん、木下さん  
▲ 1時間半かけて作業する森林へ出発

前後の男性の場合は、奥さんたちが村への移住に熱心で、ぜひ採用して欲しいとお手紙をいただいたほどです。上真手区には13棟の若者住宅や10区画の分譲住宅などがありますが、今後は住宅の確保が課題です。最近では共同住宅は歓迎されず、また新住民が一ヶ所に固まるのは好ましくないので、役場の担当者には空家を探すように言っています。空いていても盆暮れに帰宅する、知らない人には貸さないという人が多いので、それを何とかしていきたいと職員に言っています。

山で働くのは甘くない。朝6時に家を出て山でコチコチの弁当を食べる、体力もいりません。でも採用した人は、足腰を悪くして辞めた一人を除いて皆元気にこれからも働きたいと言っています。一年も経つと親などから遅しくなって思いやりのある子になったと感謝の便りがきます」

三セクによる村おこしは前村長の時、ふるさと創生資金の1億円をどう活用するかで村民と話し合った時に、「ここは昔から伊勢湾から船が上がってくるところで、これからも川と森を守っていきたい」という意見が多かった。そこで1億円で2億円を足して積立て、その利子で運営しようとして三セクの林業会社等を発足した。

「フォレストファイターズが切り出した木は森林組合で製材、MSPがプレカットして住宅建材として活用するという構想です。「森の番人」というネーミングのナチュラルウォーターを生産するグループもあり、これらは林業振興をめざした宮川ストーリー」。

県も当村をモデル地区として公益的機能重視の森林整備に助成してくれるようになりました。県が8割、村が2割を負担して5300haの山を20年間にわたって整備していくという森林環境創造事業に取り組んでいます」



▲フォレストピアは中央に宿泊施設「宮川山荘」(天然温泉付き)があり、広い緑地の周辺にはコテージ、各種体験教室を行う森の国工房、陶芸工房、テニスコート、わんぱく広場、ふれあい農園などがある  
◀(株)MSPの工場と作業風景



▼「森の番人」ナチュラルウォーターと案内してくれた大原かずみさん



▲宮川村の新しい顔、上真手地区。分譲地、村営住宅サンシャインヒル等、若い世帯やイターン者に人気がある街になっている



「日本で一番美しい村づくり」をめざす宮川村では、全地区に下水道と合併浄化槽を整備、学校や公共施設、バス停やゴミボックスなどは地元の間伐材の有効利用を図っている。一個数十万円するバス停はもったいないという人もいるが、水の里に鉄板はないでしょうというのが村長の意見。

清流の里として知名度を高めてからは「フォレストピア」の宿泊者も多くなり、こだわりの木造施設と手作り家具、ホットなサービスに加えて本格的なフランス料理が人気。「フォレストピア」の開設には県内外から株主として57名の出資があり、また支配人は開館一年前に採用して運営に当初から参画させた。また隣接する「森の国工房」には地元園地区の住民86名が「いきいき夢倶楽部」として参加し、農産物の加工、ふれあい農園の運営、施設の清掃管理等を請け負っている。

今後の村づくりについて尾上村長は、「グリーンツーリズム宮川として、農林業体験ツアーや交流事業を推進していきたい。村内を5地区に分けて地区の人にアイデアを出し合ってもらっています。自然と触れることで命の尊さを学び、心が癒され、人としての感性が

豊かになる村にしたい。環境学習では大杉谷自然学校があり3人の専門家が研修に当たっています。今後も青少年の環境学習の場として地域の人も参加して取り組んでいきたいと思っています」と語った。

#### 宮川ブランドを全国へ

宮川の源流・大台山系には良質なスギ・ヒノキが多く、これらは製材・乾燥したあとブレカットされて木造住宅建材として高い評価を得ている。熊野、松坂を結ぶ国道42号線から西へ向かい宮川村へ入ると間もなく、これらの木材加工施設を集積した工業団地がある。敷地面積は1万㎡、各工場は近代的な設備を誇り、短期間に省力化して高精度な木工品を納品している。

(株)MSPは3つの工場と素材保管庫、管理棟など建物面積だけで5000㎡あり、従業員は20名。建築現場の要望に合わせてカットする木材はすべてコンピュータ化した加工機で自動作業。高品質な構造材、羽柄材を加工しているが、最近はスギ、ヒノキによる床や壁パネル加工の注文も増えていると言う。

大台ケ原のナチュラルウォーターを商品化した「森の番人」は、最も美しい川、宮川を村おこしの資源にしたいという若者たちの熱意で(有)森と水を守る会(フォレストキーパー)が平成3年に設立され、「森の番人」の製造販売をはじめた。年間4000mmの雨が降る大台ヶ原。雨は原生林の樹海に深く浸透し、宮川の山中に湧き出る。これを120度で熱く過したもので、森が育てた粒子の細かい甘味のあるまろやかな天然水。阪神大地震時に無償提供したことがPRにもつながり、全国から注文が寄せられている。社長の門野正信さんと4人の社員が従事し、事務所は宮川流域を保全していくための活動拠点にもな

っている。

・宮川村産業課 ☎0598(76)1711

文/浅井登美子 カメラ/小林 恵

## 自然を再生して生物多様性の国土を—— 2002年地球サミット

地球上にはヒトも含めて夥しい種類の生き物が互いに関わりながら生きているが、人間活動の強い影響で多くの生物が絶滅の危機にさらされ、自然も失われつつある。2002年京都市で開催された地球サミットでは6年前に策定された前戦略を見直し、一層実践的な行動計画としての性格を持たせた。自然との共生に対する意識は高まってきたが、危機そのものはさらに深刻になっており、特に3つの危機が指摘されている。

第一は、開発や乱獲により豊かな自然が従来以上に失われていること。第二は伝統的な農業や生活と関わる自然への働きかけが無くなり、里山や田園の自然の手入れが不十分で変質していること。日本でも過疎化等により地域特有の伝統的営みや自然が失われつつある。第三の危機は日本の自然になじまない新たな生物、外来種、自然界には存在しなかった化学物質がもたしている危機。身近にいた動植物、メダカ、タガメ、キキョウ、フジバカマまでが絶滅の危機にさらされている。そのためにも森と里山の再生と、人々の自然や地域に対する関心と取り組みが一層求められている。



▲モザイク林相の諸塚村の山

# 「俺たちの村 諸塚」 山仕事も里仕事も(財)ウッドピア諸塚で

宮崎県 諸塚村  
もろつかそん

村内に職場が出来た

九州中央山地に位置する宮崎県諸塚村には、三つの尾根を隔てて村内88カ所にも及ぶ集落が点在する。それらの集落をつないで網の目状に走る林道から見下ろせば、村自慢のモザイク林相が眼下に広がる。村面積の95%が山林、宅地はわずかに1%。戦後の拡大造林の際、先人たちがスギ、ヒノキの針葉樹とシイタケの原木となるクヌギ、ナラを混交して植樹した山々だ。

成崎孝孜諸塚村長が理事長を務める(財)ウッドピア諸塚の朝は早い。出勤は午前7時半、事務所まで一日の作業を確認してから、各作業班に分かれて現場へ向かう。

林産部門の若者5人が乗った(財)ウッドピア諸塚の白いワゴン車が、舗装のない急坂の林道をあえぎながら上った。今日は、昨日切り出しておいたシイタケの原木ナラをトラックで積み出す作業だ。

晩秋の朝の光は、明暗をくつきりと際立たせ、山の連なる風景をひととき輝いて見せる。現場に着くと、特に打ち合わせもなく一斉に仕事が始まった。見原敬子さん(24)が、原木を2メートルの尺棒で測って、チョークで記しを付ける側から、山塚嘉也さん(30)と西田秀幸さん(31)が、チェーンソーで長さを揃えて切り落としていく。3人も諸塚村で生まれ育ち、高校新卒でウッドピア諸塚に就職している。

諸塚村には高校がないので中学を卒業すると、全員が一旦は村を出ることになる。その彼らが、もう一度村に帰ってくることでできたのは、受け入れてくれるウッドピア諸塚という職場があったからだ。

作業班のリーダーを務める甲斐伸吾さん(32)は、ウッドピア諸塚の前身である国土保全森林作業隊が創立された平成2年に高校新卒で就職した5人のうちの1人だ。

「村に帰って働きたいなと思っていました。中学時代まで見てきた村の祭りや青年団の活動が楽しそうだったし、家の手伝いで山の仕事には馴染みがあったから。自分は三男じゃ



◀材産部門作業班。この日はしいたけの原木の切り出し

けど帰ってきた。長男と次男は、高校の林業科を出たけど帰ってないんです」

作業班そのものが幼なじみの集団でもある。甲斐さんの親しみを込めた大きな声が谷間に響く。

「秀幸、その太てえやつを、2メートルでこぎっちょけ」

### 村の仕事は何でもする

林産部門の仕事は、地こしらえ、苗木の植え付け、下刈り、間伐、皆伐、搬出、作業道の開設管理、公園の草刈り、シイタケの原木採り、田植え、稲刈りなど、村民がしている仕事はおよそ全て廻ってくる。

出勤日は、役場の公務員と同じ。土日祭日は休み。雨降りでも、平日は仕事に出る。職員待遇も地方公務員に準じている。

平成2年に第三セクターとして国土保全森林作業隊の活動は始まった。平成7年には、財団法人ウッドピア諸塚として新たに組織化され、現在は22人の隊員が、林産部門の他にカマ茶部門、畜産部門、物産直販部門で働いている。

ウッドピア諸塚の尾形正夫参事(65)は、経営の厳しさを補うだけの存在価値があると言う。

「林産部門で、経営が難しいのは事前から承知していました。赤字を補填するために始めたカマ茶部門は黒字。畜産の林間放牧は、下刈りの手間を省き肥料の軽減になる。経営的に若干不足はあるが徐々に向上している。物産直販は、シイタケが毎年伸びてきているが、現在は少し村から補助をいただいている。赤字の林産部門にしても、下請け料金は、村民の利益を考えて設定しているので、目に見えない恩恵が村民にはあると思いますよ」

シイタケの原木を積み出す作業は、ほとんど

ど儲けにはならない。だから、ウッドピア諸塚に廻ってくるのだ。

「自分たちで山を守っているというプライドが喜びです」と、甲斐伸吾さん。

昼食になると、5人が林道の思い思いの場所に腰を降ろし、めんば弁当を取り出した。めんばは、そぎ板を使ったこの地方独特の伝統工芸品。作業班の誰もが、村の暮らした馴染んでいるのが分かるというものだ。

黒木哲也さん(40)は、ウッドピア諸塚に就職してまだ4年。以前はNOSAIで畜産の仕事をしてきた。しかし、故郷のウッドピア諸塚に畜産センターができるということで「僕にやらせて下さい」と、抱負を抱いて村に帰ってきた。ところが、事情があって現在は林産部門で仕事をしている。畜産にこだわる黒木さんにしてみれば、村に帰ってきたことに「少しは後悔もある」。万全という訳にはいかないのである。

クレーン車やチェーンソーのエンジン音が止まった昼休み。風の音と鳥の声だけが目の前に広がるモザイク林相の谷を渡っていく。

午後からは、アカマツを切り出す現場へ向かった。林道から眺めている時には、たいした斜面に見えなかったが、伐採している現場は立っているのが精一杯の急斜面。

山本浩司さん(28)が直径30センチほどのアカマツにチェーンソーを入れようとしていた。下から4、上から6の割合で刃を入れる。山本さんは、何度も梢を見上げた。チェーンソーのエンジン音が一段と高くなるのと同時に、すつと幹が傾く。ドドツと地響きを立ててアカマツが崩れ落ちた。

彼は20歳まで、大阪のホテルで板前修行をしていた。職場で朝食の準備中に、あの阪神大震災が起きたのである。

「しばらくはガラスが割れたままになってい



上 / 見原敬子さん 下 / 田中秀昭さん



▲上 / 山塚嘉也さん 下 / 西田秀行さん

▶ 昼食にはめんば弁当を開ける



▶ しいたけ栽培団地  
下 / 甲斐吉昭・美保子夫妻



て、仕事が出来なかった。休暇をとって村に帰ってきている時、隣家の甲斐伸吾くんに誘われて、ウッドピア諸塚に就職することになった。自分は長男じゃから、いずれは帰ってくるはずだったけど。今思えば、早く帰ってきて良かったですわ」

「夏場の下刈りが一番堪える。最初、皆が一生懸命働くもんじゃないから、自分も一緒にやっているうちに、目の前が真っ白くなって、分からんようになってですね。脱水症状で病院まで運ばれたことがあつとですよ」

夕暮れ近くになって、シイタケ団地の甲斐吉昭さん(47)と美保子(43)夫妻を訪ねた。一棟に2500本のほだ木。発生棟が2棟、休養棟が1棟。ほとんど毎日、朝夕収穫する。

「市場に出す頃は、単価計算ができないので収入は不安定でした。5年前にシイタケ団地ができて収量が安定しましたので、今は、単価を決められるスーパーと契約しています。以前は、干しシイタケでしたが、食えんもんで日雇いに行っていました。安定した収量があるというのが大事なんです」

**諸塚の材は諸塚の文化だ**

諸塚村が林業立村の基幹と位置づける木材、シイタケ、茶、牛は、山が多様で豊かになければ育たない産業だ。

「しいたけの館21」の矢房孝広館長(41)は、諸塚村の山が豊かであるのは、諸塚方式自治公民館活動があるからだと言つ。

「諸塚の山は人工林率が86%。それもスギ、ヒノキの針葉樹が7割、シイタケの原木となるクヌギとナラが3割のモザイク林相になっています。そのおかげで、水源涵養、水質保全と小動物の生息地の役割を担うことができます。それには奥があるんですよ。村

内に88の集落が分散している。村内には、16の自治公民館があり、村行政と車の両輪として、対等の役割を果たしている。山を守るには良い組織です。集落を守ることは山を守ることになりすから」

一般論で言えば、集落の分散は行政効率が悪いと嫌われるのだが、それを逆手にとつて「山を守るのに都合が良い」と、考えるところが山で生きる諸塚村である。

諸塚村の村おこしの基本方針の一つに「森の恵みを永続的に活用し、今後とも林業を地域経営の柱にしつつも交流人口の誘致を図り、林業と交流産業を中心とした複合経営を行うこと」というのがある。

その具体的な試みが、諸塚村産直住宅プロジェクトである。平成8年から村が取り組み、現在までに55棟の実績をあげている。

「しいたけの館21」の矢房館長が、産直住宅ディレクターも務める。

「諸塚の材は、単なる建築材料ではなく諸塚の文化なんですよ。市場に出してしまつたら、他の材と混じつて特徴は見えなくなる。施主とつながっていないのが一番いけない」と、



▶ 「しいたけの館21」展示室と88集落コーナー(下)  
◀ 諸塚木材加工センター

顔の見える交流関係をつくりながら住宅を売ろうというのだ。

晩秋の連休、福岡の施主と一緒に「熊本家づくり塾」のメンバーが、木材と山を見に来ると連絡が入った。「熊本家づくり塾」は、設計事務所と施工会社、それに畳屋と環境コンサルタントがメンバーの家づくりを研究しているグループだ。諸塚木材の良さを知って、村とは5年前から交流を続けている。

施工会社代表の立山誠也さん(42)は、諸塚材を使うのは単に材の良さだけではないと強調する。

「九州の山はほとんど一緒。どこまで丁寧に消費者に手渡してくれるかが大切。それをやってくれるのは諸塚しかない」

まずは製材工場を見学。設計事務所の稲崎卓哉さん(51)と施主の小川和一さん(47)富士子さん(44)夫妻を矢房館長が案内する。野積みになっているスギ材に水分測定器を当てると、デジタルの数値が24を示した。「1年で水分が40%まで落ちていきますね」と、矢房館長が説明する。立山さんも諸塚材の良さを理解してもうおうと補足する。

「人工乾燥が良いと言う人もいるけど、自然乾燥の方が油が残るとですよ。50年後80年後に、どっちの木が持つかと言えば自然乾燥ですね」

稲崎さんが、製材して積み上げてある梁材を示して「この辺の材料を使います」と説明すると施主の小川さんは、とたんに家を建てるという実感が出たようだ。「目の前で木を見てみると、やっぱりうれしさが込み上がってきますね」。

続いてモデルハウスの見学。小川さんはいよいよ実感が湧いたようだ。

「天井が三角形でむき出しと言われていたが、イメージがどうしても分からなかったんです

よ。これやったら娘も嫁にいかんと言っかも知れん。子供部屋が一番せいたくやな」

手を伸ばして梁に触れ、床に寝てみて、「触った感じの温かさが違いますね」

最後に、葉枯らし自然乾燥の現場を訪ねた。スギを伐採する際、梢を斜面の上にして倒し、そのまま3、4カ月乾燥させる方法で、伐採の技術が必要とする。根元を切られても、スギは葉から水分を出し続けて乾燥を早めることができるのだ。

小川さんは、そのスギが70年前に植林したものだと聞いて「70年前の人が植えたスギで家を建てるわけですからね」と、スギが単に家を建てる材料ではなく、山で生きる人々の人生が詰まっていることに気づき、家を建てる重大さを新たに意識したようだ。

諸塚村は人口2400人余、約800世帯が山間で暮らす。ここに、まったく手つかずの悠久の森があるというのではない。人が森を活かし、森が人を活かす身近で豊かな山林

が、諸塚村の山である。

「俺たちの村、諸塚」と、誇りを持って山で働く若者が支える村である。

・諸塚村産業課 ☎0982(65)1111  
・しいたけの館 ☎0985(65)0178

文・カメラ/芥川仁



▲ 葉枯し乾燥の現場を見学



▲ 木材の乾燥状態をメーターで測定



施主小川さん立ち会いで、稲崎卓哉さんが材木を持ち上げて乾燥状況を見る



木材の水分含量を説明する矢房孝広館長(左)

# 下北半島の自然と共生する森づくり 恐山山地森林生態系保護林、大畑ヒバ天然林

美しいブナ原生林とヒバ自然林  
恐山山地森林生態系保護林

まず、むつ市内にある東北森林管理局下北森林管理署を訪ねた。青森ヒバ材で建てられた瀟洒な2階建て事務所。次長の阿部利行さんが待っていてくれて、早速クルマで下北森林管理署の管理する山へ案内してくれることになった。パトロールする時に職員が着用する制服とベレ帽がよく似合っている。

森林管理署はかつては営林署とよばれてきた役所で、国有林と官行造林の管理を行っている。下北半島の森林は大半が国有林でその面積は8万7000ha、1市7町村に及んでいる。

「下北には宇曾利郷と呼ばれた頃には蝦夷（アイヌ人）が住み狩猟・漁労の生活が行われ、森林は大切に守られました。海運が発達するようになるとヒバは北陸等へ出されましたが、やがて南部藩が管理して留山制度を設けて守られてきました。明治維新になると藩有林は国有となり、明治19年林野局の設置とともに青森大林区署、下北半島に川内小林区署、大畑小林区署等が設置され、以来幾度か変遷して平成16年から東北森林管理局下北森林管理署として下北半島の6割を占める国有林を管理することになりました」と阿部さん。阿部さんは岩手県出身。高校を出た18歳の時公務員試験に合格して、下北の営林署勤務となったという。

「昭和42年頃は下北半島の国有林で働く人は職員・作業員併せて1300人いました。作



恐山山地のヒバ自然林

世界遺産に指定された白神山地をはじめ、十和田、八甲田山など、豊かな森に恵まれて観光客で賑わう青森県だが、下北半島の一角にヒバとブナの素晴らしい原生林があることを知っている人は意外と少ない。下北半島の森林の大部分は国有林。厳しい自然と向き合いながら独自の施業法で育成してきたヒバ天然林やブナ等の広葉樹との混交林は、森林生態研究調査の実験林となっており、一方で北限のニホンザルやニホンカモシカの貴重な生息地にもなっている。これらの森の保全と育成に当たる下北森林管理署の阿部次長の案内で現地を訪ねた。



業現場は山奥のため山小屋に泊り月曜から土曜日まで働きました。仕事はもちろんのこと、焼酎の飲み方、戦争体験など人生について山頭や先輩から学びました。土曜日町へ出ての一杯も忘れられない思い出です」  
ところが現在職員は作業員と併せて94名。森林行政の厳しさをいきなり知らされたという感じだ。  
クルマで約30分、ブナやカエデなどの紅葉がひととき美しい林となり、落葉で染まった道路わきに「延命の水」と呼ばれる名水が現われた。ヒバとブナの林が育んだ豊富な地下水で、何台かのクルマが水取りに来ている。水場の周りに立つ素朴な石仏たち軽く手を合せてから名水を頂いており、信仰の山・恐山へ入って来たことが実感できる。  
近くの森では森林管理署の職員と森林総合研究所の職員が合同でヒバ林の成長量の調査

上 / 恐山近くにある「延命の水」  
下 / 紅葉が美しいブナ原生林

をしていた。森林を守り育てるためには研究機関の協力が不可欠だと言う。

その奥、恐山・宇曽利湖の南岸に広がる森がヒバとブナの天然の混交林。秋の紅葉シーズンは黄金色に輝くブナやカエデ等に深緑のヒバがよく調和し、紅葉が映える大変美しい森である。恐山林道のゲートを開けて阿部次長がさらに奥に案内してくれた。

恐山山地は、森林生態系保護地区に指定され、恐山の火山湖である宇曽利湖の南から西岸にそびえる外輪山のうち、屏風山、北国山、大盤山、円山などの800m級の山を結ぶ山稜の北から東側斜面に位置し、その面積は1187ha。すべてが国有林で下北森林管理署が管理している。原生的な林相が比較的良好に保たれている地域で、ブナとヒバが混交しているのが特色。

場所によって、ヒバが優先する森林と、ヒバとブナが混交する地域があり、標高が高くなるにつれブナ純林になる。「この保護地区には保存地区と保全利用地区があるんです。保存地区は学術研究などの利用以外は人手を加えず、自然のままにしています。保全利用地区は保存地区の森林に外部の環境変化の影響が及ばない範囲で、森林浴や自然観察の場にも活用する地区にしています。ただし木材生産のための伐採などはしていません」と阿部さんから説明があった。

ブナは白神、十和田湖周辺にも多いが、恐山山地のブナの美しさは格別だ。厳しい自然環境にありながらこのブナは幹が白くてみずみずしく、枝を空いっぱいにはびのびと伸ばした形のよいものが多い。今年実をつけた木が多く、大粒の形のいい実が道路にも落ちていている。ヒバとの混交林ではヒバとブナが合体した珍しい樹もあり、茶褐色の荒々しさと白色のきめ細かい肌の合体は何ともエロチックだという。黄色に紅葉したカツラの木の

下を通ると、ほのかに甘い香りが鼻腔に漂う。山歩きの時などカツラの香りで疲れが吹き飛ぶという。

### 人手は加えない 自立したヒバたち

ヒバの大木だけの森林は昼なのに暗く下草も見えないが、大小年齢の異なるヒバの森は明るく、地表にはヒバの稚樹や笹・灌木が生え、自然体で競い合っている。成長期のヒバは樹の頂点を矢尻のごとく天に向け、肉厚の葉は太陽の光を一つも逃すまいと茂りその逞しさは感動的である。

ヒバは北海道渡島半島から本州、四国、九州まで広く自生する日本特有の樹で、アスナロの変種のヒノキアスナロの総名称。冬期はマイナス10〜20度、積雪3mにもなる下北半島の冷温帯森林に生育する青森ヒバは厳しい風雪に耐えて育った樹だけに、木材としての価値が高く、またヒバ特有の匂いが濃厚で、香料としても人気を呼んでいる。

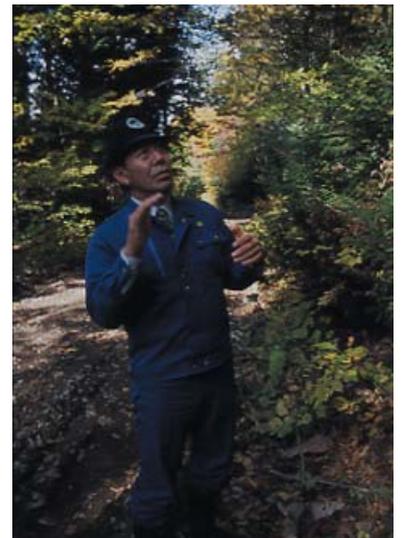
阿部さんがクルマを止めて、「ヒバの家族が勢ぞろいしていますよ」と左手の斜面を指さした。見上げると斜面の上の方に樹齢150年以上と思われる老木のヒバが数本立ち、その下の方には中径のヒバたち、さらに足元の道路には幼木のヒバがぎっしり枝をはって生い茂っている。

「足元の実生のヒバから見ると、一番上のおじいさん、おばあさんで、その下が親たちということになります。これが一つの構成群なんです。森の中では樹木や水、昆虫も動物もお互いに影響しあって有機的に結びついた共同生活をしています。この群も時間の経過とともに変化し移相していきます。だから私たちはできるだけ自然の状況を配慮しながら、人手を加えて優良なヒバ林にしていくわ

けです」

スギ・ヒノキに比べてヒバは人工林での成功例が極めて少ないという。「郷土樹種として早くから国有林において人工林を試みてきましたが、期待しているようには成長してくられません。野生種の強い動物と同じように、あたかも人間の手によるものを拒み、己を理解した術のみに果実を与える」。青森ヒバはプライドが高く我がままなんです」

建材としてもヒバ材は優れているという。スギ材が約50年で腐ると言われるのに対して、ヒバは長年放置しておいても表面はアマという灰色に変色した層になるが、アマを除くと元のままの材が表れる。雨や風に接する部分は変化するが中身は腐らないところが他の樹木と大きく違うようだ。また「私たちがヒバの良材をめざして枝打ちをすると、商品にしたとき死節となり、使い物にならないというのを先人から聞いています」とも。「この苗を他所へ持って行って植えても成功例は少なく、下北のヒバはこの下北の気候と風土が長い年月をかけて作り上げて来た郷土樹木といえます。人手を借りず、自ら種子と枝を地面に下ろして伏状に増殖していくヒバを私たちは見守り、ツル切りや間伐など公益的機能が果たせるよう手伝うだけです」



上/下半のヒバについて語る  
阿部利行下北森林管理署次長  
下/観光客に人気の恐山菩提寺境内



赤土の上の比較的浅い腐葉土に根を張るといふが、恐山のヒバ林が豊かなのは、ブナなどの広葉樹が混生することで、落葉たつぷりの肥沃な大地になっていることも要素だろうと思う。様々な木々が支えあい競い合つてパランスのある森を形成していることを、見事な紅葉を見ながら感じた。

恐山は高野山、比叡山と並ぶ日本三大霊場の一つ。神の山々ということもあつて、このブナたちは伐採を免れてきたのではないだろうか。これからも全国に誇る混交林、生態系保護林のモデル地域として広範に保全して欲しい。

森を出て観光客で賑わう恐山菩提寺へ。その昔火山噴火によって誕生した宇曾利湖の深いエメラルド色と周辺の溶岩が作った白砂と奇岩が独特の雰囲気をかもし出している。貞観4年(862)に慈覺大師円仁によって開山したもので、地藏堂の脇には参拝者が無料で入浴できる温泉小屋が何棟もあり、裏手の岩場からは今なお硫黄が噴き出し、それが川となつて流れ出ている。「三途の川」とも呼ばれるように、死後冥土の世界を彷彿させる世界があり、「人が死ねばお山(恐山)へ行く」といわれ、大祭には巫女に祈禱してもらつて亡き身内と語りたいたいという人々が押し寄せ、下北の深い山々の中で味わう非日常的な不思議な場所である。

### 祖父から親、孫へ、ヒバの家族たち 大畑ヒバ施業実験林

恐山で昼食を取つた後、下北森林管理署が長年にわたつて育成、研究調査を行つて来た大畑町葉色山のヒバ施業実験林へ向かつた。県道「恐山葉研線」を通り葉研温泉に到着、国設葉研野営場を過ぎて林道に上がるとヒバ林を遠望する絶好の場所が現われた。

クルマを降りて阿部さんが「ほら、ここから恐山の方向を見ると青紫色した霞が山々を覆っているのが見えるでしょう。ブルーフェイズといつてヒバ林から発散された物質が覆っているんです。この物質には多くのテレビペン類が含まれていて雑菌や害虫などを寄せつけないと言われていました。私たちもヒバ林で働いていると、朝気分が悪くても半日もすると体調がよくなるんです」。ブルーフェイズの山々は幻想的で神秘的である。

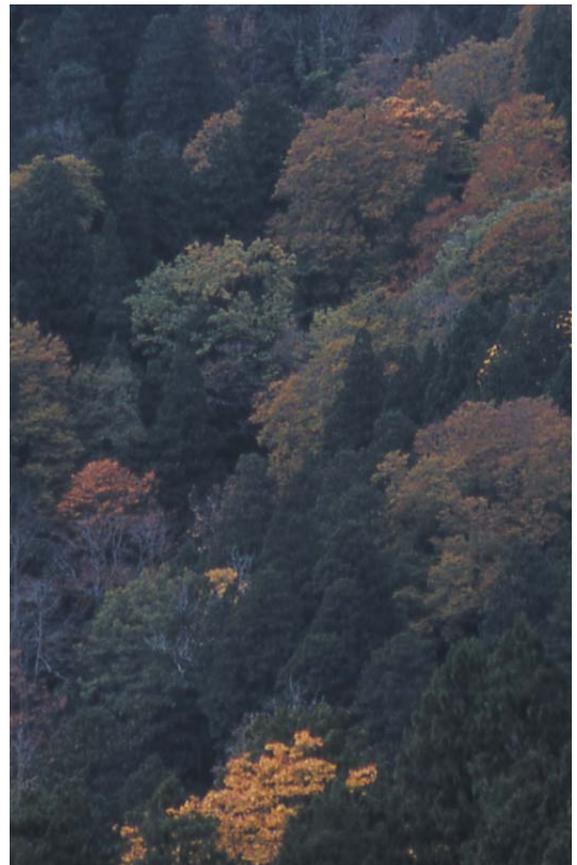
現在のような育成管理体制が確立したのは、大正時代に松川恭佐(農学博士)らが大規模調査を行い、「ヒバの郷土でヒバに最もあつた施業方法の確立をめざす」という施業方法の提唱がベースになっており、経営的価値のあるヒバ天然林の確立をめざした。

大畑ヒバ施業実験林は松川博士の提案・指導により昭和6年に設定、南北2・6km、東西1・8km、約222haの面積を持ち、80年間にわたつて各種研究、調査を継承してきた。その基本は、森林植物を面ではなく群で捉え(森林構成群)、群の良いところは伸ばし、悪いところは取り除いて活力ある森林に施業するという方法、林地は20個の林班に区分され、さらに森林構成群に合わせて小班に細分されている。林班は1年に2箇所づつ施業し、10年で循環することで永続的な森づくりをめざしている。

設定当時は約3分の2がヒバと広葉樹の混交林、3分の1がブナの老木だったが、現在は80%が良質のヒバ林になっている。

大畑のヒバ施業林は、群によつて自然の推移にゆだねている地区、枯れ枝や不良木を除去する等人手を入れている地区などがあるが、全体的にとても美しく活気にあふれている。ほんの数時間の観察だったが、植物達はファミリーを形成し、その中で枯死と新しい命の

▼ブルーフェイズの恐山の山々



芽生えのドラマがあることを実感した。ここではヒバ達は理想郷に近い環境を約束されているが、日本の森の木々の多くは人から観察されることも手を加えられることもなく「助けて!」と叫んでいるに違いない。山麓へ出ると、大きく立派なヒバの丸太をうす高く集積している広場があつた。実験林には樹齢300年以上のヒバも多いが、これらは保全し、材としては150年前後、直径50、60cmのものが中心で、間伐や搬出の際には他の木や幼木に損傷がないよう立木にカバールを付けた積雪時に行つていふという。伐られた貴重なヒバたちは東北各地へ出荷さ

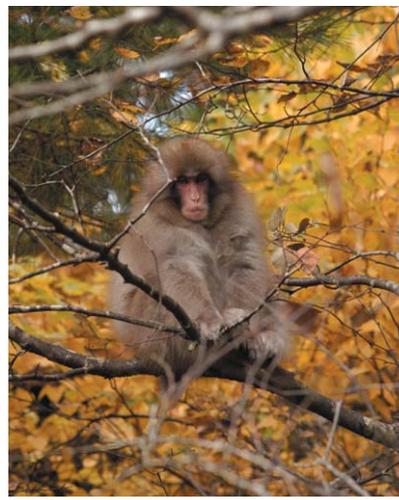


▲ 伐り出されたヒバの丸太

▲ 倒木の周辺にはヒバの実生が元気に育っている

れ、今年度は約18億円の収入を予定して事業を行っているという。

「国有林野事業は木材の低迷する中、国民の森林に対する多面的な要望が高まり、経営的には大変厳しい状況にあります。幸い下半島の国有林はヒバ林があることから現金収入があり、これまで黒字を続けております」と阿部さんは語っていた。



## 北限のサル、ニホンカモシカを守る

下北森林管理署の管理する国有林には、恐山地の1187haをはじめ6箇

所1336haの保護林がある。また、国設下北鳥獣保護区として4904ha、特別保護地区として1068haを設定し、北限のニホンザル、ニホンカモシカ等の保護に当たっている。世界最北限に生息する下北のニホンザルは国の天然記念物に指定されており、マイナズ15にもなる厳寒期の吹雪の中で生き延びて来た。木の皮や芽を食べ、木の上で抱き合っ

て暮らす冬、豊かな森が彼等の命を支えているのだらう。  
風間浦村の下風呂温泉に宿泊した翌朝早く、脇野沢村へニホンザルに会いに出かけた。フェリー乗り場で待っていてくれたのはサルの調査や保護活動を長年手がけているカメラマンの松岡史朗さん。兵庫県出身、各地の森や野生動物を訪ね歩くうちに脇野沢のニホンザルに出会ってすっかり魅せられ、村に定

住してしまっ

た。村の七引地区にはニホンザルを保護するために設けた野猿公苑があり50頭を飼育している。そのサルたちが気になるらしく野生のサルが訪ねてくるのだという。小高い場所の広場には、冬を前に晩秋ののどかな日ざしの中で木の葉や実を食べたり、親子や仲間と毛づくろいをするサルたちが30頭ほどいた。

「人には比較的慣れていますが、人の持物を奪い取ったり給やチョコレートなどは決して食べません。食べ物を求めてかなり広範囲に遊動しながら群れごとに自立して生活しています。人には媚びない、それが厳しい冬を乗り切ってきたこのサルたちの知恵でありプライドでしょう。暖かい地域のサルに比べて体が大きく、体毛が細くて長く、密生しているのが特長です」と松岡さんは言う。

冬に向かって、白っぽい綿毛に覆われた姿は美しくて気品があり、皆個性的な顔をしている。

しかし保護され森が豊かになるに従いその数は増え、1960年代の調査では6群200頭だった下北のサルは、現在27群1400頭までになっている。そのため山里の農産物にも被害が発生し、村では一部の地域にフェンスを張ったり、サルの監視員を配置している。この公苑の一角に監視員が竹竿を持って立っていた。監視員は8人いて交代で仕事しており、特にこの時期は田んぼに干してある稲束を持っていつてしまつので見張っているらしい。

松岡さんが所属する下北半島サル調査会では手弁当で40年間にわたり年2回追跡調査を行っている。

「家族や仲間を何よりも思いやるサルの集団や、下北の厳しい自然の中で暮らすカモシカから人間が学ぶことはとても沢山あります。

人々が北限のサルと共生することが、この地方が培ってきた文化であり魅力だと思っんです。でも農家の人の中には憎い、殺せという人もいる。サルでなくても美味しい餌があればそれを食べたいと思うもの。それは森の豊かさとは関係ありません。農家の人にお願したいのは、フェンスに穴が開いたから隙間が出来たから直してくれと何もかも役場頼みではなく、自分がどうしたいのかはっきりとした意志を表示し、自分の畑や農作物は自分が守るといふ姿勢を持って欲しいんです」

ニホンザルの保護・調査活動に当たる植月さん(左)と松岡さん(脇野沢村)

「このサルたちは夏にはブナ林などへ行き、冬は海辺のこの辺りで越冬します。海辺の方が山より1、2 暖かいんです。周辺はニホンカモシカの密度も高いんですが、森が広くて豊かなせいか、農作物や植林樹への被害届けはありませんね」



ツキノワグマについては、一時期開発が進む六ヶ所村やむつ市などに出没して話題になったことがある。

「野生動物には森林の開発やその年の木の実際の豊作がすごく影響します。クマは100頭ほどはいると思いますが、保護するために今後調査が必要です」と植月さんは語っていた。  
・下北森林管理署  
☎0175(22)1131  
文/浅井登美子  
カメラ/小林 恵



## 本物の森の激減

日本は世界でも森が多いと言われていて、今でも林野面積は国土の67%である。しかし、多彩な防災環境保全機能を果たし、時間とともに優れた地域景観の

主役となるいのちの森ともいえる土地本来の森や樹林はあまりにも少ない。

現在木を植え、森をつくることは地域社会でも声高に叫ばれている。かつては国土のほとんどが鬱蒼とした森で覆われていた。素朴な生活をしていた古代人には、森は生活を豊かにするための邪魔者ですらあったかも知れない。やがて人類は火を使い、稲作が導入され狩猟採集時代から定住生活をするようになって、森を切り出し、川沿いの低地では稲を栽培し、周りの台地では焼き畑農業で穀物を栽培してきた。

当時は橋も建物も生活基盤は木によって作られた。木や木材を生活の必需品として盛んに利用している間に、いつの間にか集落の周りから自然の森は消えていった。

現在里山と言われている雑木林は薪炭林として何百年もの間20〜25年ごとに定期的に伐採し、落葉や下草も有機肥料として使ってきた人間の知恵と管理によって維持してきた遷移の途中相である。

このように粗放的ではあるが、一定の人為的管理と共生してきた里山の雑木林、マツ林、スギ、ヒノキ、カラマツの植林などにより、日本の国土には様々な緑が維持されてきた。しかし今

## ”鎮守の森”を復活してふるさとを再生 一村一森運動

宮脇昭

横浜国立大学名誉教授

イラスト／松田けんじ



# 植林の 効用

では、過疎化と都市部への人口過集中によって山間部の緑は荒廃している。また、各種の自然開発によって地域の背景の緑、防災環境保全機能を果たす土地本来の本物の森が、都市域はもとより全国的に激減している。

我々は新しい時代に対応した森が、豊かな人間生活を支える大切な機能を持つていることを見直し、各々の地域に生まれ育ち、学び働いている人たちのいのちと文化、生まれてくる子供たちの遺伝子資源を守る21世紀の、さらに次のミレニアム(千年紀)まで続き発展するような本物の森づくりを進めなければならない。

## 木材生産

今まで木を植える主な目的は木材生産であった。かつて針葉樹が住宅建設、その他で有用であったために世界中で土地本来の広葉樹を主とする自然の森は伐採され、日本ではスギ、ヒノキ、マツ、カラマツ、ヨーロッパでもマツ、トウヒ、モミ類などの針葉樹の単一樹種の画一的な造林が行われてきた。今後木材生産を目指す場合には経済的に対応できれば客員樹種の単一植栽も必要である。

しかし、土地に合わない樹種を植えた場合には少なくとも植樹後、20年以上の間、下草刈り、枝打ち、つる切り、間伐などの林業管理が必要である。しかし、長い間急斜面や奥地の山間部まで植えてきたスギ、カラマツ、ヒノキなど厳しい山地労働の結果育てた成木

林は、現在では外材に負けて、経済的にも伐採すれば赤字になるような状態で、日本の木材生産を目的とした林業行政は深刻な問題を抱えている。

## 雑木林を切って芝生公園化

鉄、セメントや石油化学製品などによる画一的な非生産的構造物から成り立っている都市域では人工環境化が極端に進み、市民は土地本来の森から隔離されるようになった。そのため現在限られた空間にいかにも美的な緑をつくるが必要で、いわゆる花一杯運動も大切である。しかし、一時的な好みや流行によって土地の潜在能力を考えずに植えた客員樹種や外来樹種はほとんど永久に管理費がかかる。しかも根の浅い外来樹種などは定期的に剪定しないと台風、乾燥、風害などほんのわずかな自然のゆりもどしでも倒れたり、枯死する危険性がある。

ヨーロッパでは有史以来家畜の林内過放牧のために森が崩壊し、荒野野状態になった。公園景観の語源である芝生公園づくりを進めてきたが、それが日本の都市公園的手法として、画一的に都市部はもとより地方でも雑木林まで伐採、造成して行われている。このような芝生公園的な公園が導入されるまでは、町でも村でも、お祭り広場、憩いの場として今日なお各地に残されている神社やお寺の森に囲まれた境内が日本人のこころのふるさとであった。地震、大火などの災害に対しては一時的な逃げ場所にもなった。また、派手ではないが何度も訪れたくなるようないやしの場としての土地本来の樹

林に囲まれた鎮守の森は、地域景観のシンボルでもあった。

この日本の伝統的なふるさとの木によるふるさとの森づくりのノウハウが都市域や各地の公園はもとより、農山村などにも積極的に導入されない限り、都市化が進んでいる市街地では生物の一員としての人間の持続的な生存すら危ぶまれる。また過疎地などで新しい日本のふるさとの魅力をよみがえらすことができないのではないかと。

## いのちを守る ふるさとの鎮守の森

我々日本人も有史以来森を伐採し、焼き畑農業をやってきた。しかし稲作が導入されてからは、集落や水田のまわりは里山の雑木林として多面的に緑を手入れし、樹林を使い共存してきた。新しい町や集落づくりで自然を変えてきたが、ふるさとの木によるふるさとの森をつくり、守り育ててきた。現在国際植生学会などで公用語になっている「鎮守の森こそ、日本人のこころのふるさとであった。かつてこの集落でも鎮守の森が地域の景観としてあり、このような土地本来のふるさとの森は宗教的なたたり意識によって残されてきた。

しかし今や、自然に対する畏敬意識も宗教的な崇り意識も極めて低下してきている。従ってもの見事にこのような集落にも土地本来のふるさとの森が急速に消滅を強要されている。

神奈川県に例をとってみても全国土の2000分の1弱の狭いところに人口は860万人を突破したが、2850

あった鎮守の森は今や45ヶ所しか樹林らしいものは残っていない。

かつては日本人のほとんどは農民であった。家の家督を継ぐため長男は必ず跡取りとして、田畑を耕し、周りの里山を管理して、その家や集落を守ってきた。次男や三男は都市へ流れていった。従って都市の人口が超過密になり、思わぬ自然災害や疾病で人口が消滅を強要されたとしても、それぞれの地方の農山村には優れた日本人の遺伝子が残されていた。しかし昭和30年代から新しい産業の急速な発展により、地域を守ってきた長男を含めて一家をたたくで都市に移住していった。過疎村という言葉で象徴されるように、一千年以上も日本人の素晴らしい遺伝子を温存してきた各地方の農山村がいま荒廃し、鎮守の森に象徴される本物の森も失われている。

緑の少ない、いわゆる都市に生活している人達の最後のいやしの森、緑の自然の保養所としても多様な機能を果たすのは、各地に残されたふるさとの田園景観、山村地域である。すべての日本人が明日を健全に生き延びるための母胎は、緑豊かな日本の農山村である。かつて秋祭り、夏祭りを行い、そして嬉しい時も悲しい時も過ごし、新しい希望、活力をよみがえらしたのは、それぞれの地域のふるさとの森に囲まれた神社、寺院の境内であった。今やすべての日本人の潜在的な心のふるさとであったはずのふるさとの森までが消えよつとしていく。

我々が生きていくためには新しい産業の発展も必要である。都市の形成も

必要であろう。しかし、そこに住む人たちの生存の原点ともいわれる、ふるさとの森に象徴される多様な自然が失われた時には、ほんのわずかな自然のゆりもどしによってすべてが壊滅的な被害を受ける危険性がある。

一方においては自然の開発、地域計画、都市計画、農村における交通施設の整備も必要であろう。同時に、我々が健全に生き延びるためには、2000年以来日本人が新しい村づくりに必ず活用してきたふるさとの木によるふるさとの森を防災環境保全の森づくりとして進めることが必要だ。

日本の伝統的な鎮守の森と、まだ不十分ではあるが生命集団と環境とのかわりを研究しているエゴロジ、特に植生学とを総合した21世紀の命の森、ふるさとの森を、足元から全国土、アジア、世界に広めなければならない。

## 21世紀の森づくり

主役を  
とりちがえない

我々が日本各地、世界38ヶ国を現地調査した結果では、今まで生き残っている土地本来の多様な防災環境保全の機能を果たす多層林の機能を果たす多層林の森は地域の潜在自然植生を基本とした主木が中心となっている。現在は植物の世界でもにせものが横行している。本物とは厳しい環境にも耐えて、長持ちするものである。それは多分生物社会のすべてに通じる基本であると思われるが、土地本来の森をつくる場合にその主役を取り違えない。トップ

とそれを支える3役、5役の木の種類、さらに多くの森を形成しているだけで多くの亜高木、低木を自然のおきてにしたがって混植、密植する。

植物は根で勝負する  
幼苗植栽

都市公園でよく使われているような根の不十分な成木を支柱で支えるようなやり方では本物のいのちの森はつくれない。土地本来の森、すなわち潜在自然植生の主木を中心にできるだけ多くの樹種を混植、密植する。本命の樹種、たとえば日本の冬も緑の常緑広葉樹林（照葉樹林）帯では海岸沿いにはタブノキ、シイノキ、内陸ではシラカシ、アラカシ、ウラジロガシなどのシイ、タブ、カシ類である。北海道や信州の山地ではミズナラ、ブナ、カシワ、カエデ類である。このような本命の樹種は深根性、直根性で、裸苗では移植が困難である。従ってポットなどの容器栽培をして2、3年で根が容器内に充満した幼苗を自然の森のおきてに沿って混植、密植する。いわゆるドングリ作戦である。

## 一村一森 運動を

都市の人も積極的に参加して

現在環境問題はハードからソフトまで幅が広い。また過疎地と都市とを結ぶ両者が少し我慢しながら、楽しく、

手をたずさえて共に生き延びていける方法の模索が行われている。最も間違いないことはかつて日本人のふるさとであったが、いま、過疎化が進んでいく各地方に、できるだけ多くの都市の中で日夜過ごし、学び、働いている人たちが新しい気力と健康を回復し、こころを癒すために積極的に出かけること。残された樹林の中で、パーチャルの世界でコンピュータによって乱れたこころや疲れた体を回復するために、土地本来の森の主役のシイ、タブ、カシ類、山地ではミズナラ、ブナの種を拾い、共に額に汗し、土に手を接して根の充満した幼苗をつくる。翌年または翌々年には地元を持ちかえり、たとえ狭い空き地でもいから植えて、本物の命の森をつくらう。

行政は舞台監督、市民が主役

森をつくるといえばたいへんな仕事と考えられるが、たとえ幅1mであってもほつこらと土を盛ってそこにその土地の自然の森、潜在自然植生、の主役であるシイ、タブ、カシ類や山の上ではブナ、ミズナラ、カエデ類の根群の充満した幼苗を市民が主役となり、1時間で1人10本以上植える。

県、市町村や各種団体、企業は黒子の舞台監督で、植える場所の選定や町と村の人たちの交流計画などを策定する。限られた地域や町、村の間でも、できることから、すべての人たちが現場に出て、共に混植、密植していく。環境問題の対策は色々あるが、今すぐどこでも誰でもできるのは、私たちの遺伝子を守る、そして未来に続く防災

環境保全林づくりである。土地本来の森の主役の木を中心に幼苗を自然のおきてで混植、密植する。十分に稲わら、まわりの草をマルチング、すなわち敷く。植えて2、3年は草をとることは必要である。そこで植えた翌年から育樹祭を計画する。木を植えた市民は友人、家族たちと植樹祭以外にも集うこと。

とった草はそのまま林床にひろげておいてマルチングの追加材料に役立てる。3年たつたら幼木の葉が繁って光が林床にあまり直射しないので、雑草が生えない。以後は自然の管理に任せる。3年、5年たつても管理費がかかるのは土地本来の森とは言えない。

足元から世界へ

緑は百人百色でそれぞれの思いや願い、流行もある。最も大事なことは、この限られた国土で数千年来、ときには火事、地震におののきながらも生き延びてきた日本人の英知が行ってきた世界に誇るふるさとの木によるふるさとの森である。かつて、どこの集落にもあった、そして今失われている鎮守の森に象徴される本物の防災環境保全林を足元から世界に向かってつくる。

今すぐどこでもできる一村一森運動は村や集落だけでなく、企業も学校も各団体もそれぞれの場所で、できることから始める。死んだ材料で作ったものは時間とともに劣化する。しかし、本物のいのちの森は3年間草取りの管理をすれば、あとは自然のおきてに従って、互いに限られた空間で競争しながらも少し我慢し、種の特性に

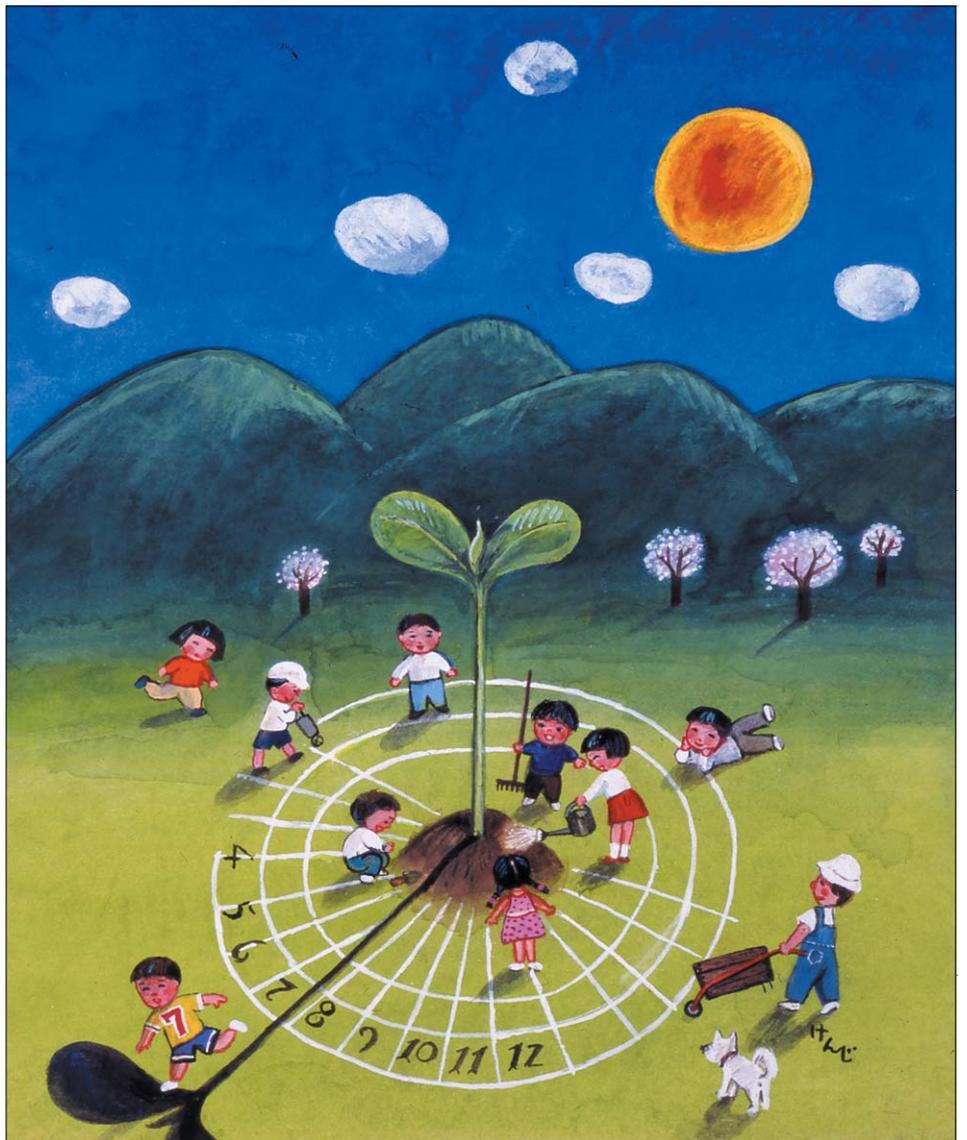
じて時間とともに5年で4m、10年で8m、20年で15mの高木、亜高木、低木となり、下草も生育して生物的多様性を回復し、防災環境保全の役割を果たす。このような森で囲まれた空間こそ、植物の寄生者の立場でしか生きていけない人類が、確実に未来に生きるのび、さらに発展するための唯一の現実な戦略ではないか。

### 過疎地域と都市を結ぶいのちのきずな——森づくり

やり方としては自分のいのち、遺伝子や健康を守るためには他人まかせでは十分でない。すべての市民が主役となり、黒子に徹した行政、企業のリードのもとで10人100本、100人1000本、1000人1万本のよう

に植樹祭を足元からはじめていく。いままで国内で800ヶ所、ポルネオ、アマゾン、中国の都市、高速道路沿い、農村のまわりの半砂漠地から万里の長城周辺まで1200ヶ所で行った植樹祭では、都市部の人はもとより、地方の人も参加、ブラジルのアマゾン周辺やマレーシアでは若者も老年者も女性も共に額に汗し、1時間に10本から20本植えた。最初の1本は少しとまどっているが2本目からは夢中で植える。そして雨の日も風の日も植えて、敷き藁までしてすべての植樹作業を終えて帰る時のあの明るい笑顔。

万里の長城沿いで北京市人民政府とイオン環境財団との話し合いで2000年まで3年間で日本から39000人の身銭をきったボランティアの人が参加して、生態学的な森の回復、植樹活



みやわき あきら氏/昭和3年岡山県生まれ。広島文理大学卒、横浜国立大学教授、平成5年名誉教授に。「ふるさとの木」で森を再生する独自の植樹法を実践し続けて30年、1万数千カ所の現地調査を行い、国内で780カ所の森づくりを手がけた。90年以降はマレーシアやブラジル、アマゾンの熱帯林再生にとりくみ、中国の植林活動も指導中。(財)国際生態学センター(JISE)所長他。主な著書に「植物と人間」(NHKブック)、「森よ生き返れ」(大日本図書)、「鎮守の森」(新潮社)、「緑環境と植生学」(NTT出版)、「緑の回復の処方箋」(朝日選書)等。

まつだ けんじ氏/昭和15年北鎌倉生まれ。20年雪国新庄へ疎開し、高校卒業までを過ごす。日本大学芸術学部卒。子どものころの新庄での体験を原風景として、風土に根ざして生活する人、行事、自然などを描き、著書に「ちえれんこやっさ(新庄祭りの絵本)」、「ふるさと(唄歌の絵本)」、「わらべうた絵本」、「一期一会(武道のこころ)」、「昔むかし」など。

動を行った。7月の32度以上の暑いところで1時間以上もはげ山に向かつての森づくりであった。東京からきているオフィスに勤めている若い女性も北海道や九州から参加している熟年者の皆さんも共に額に汗して植えた。「なぜそんなに一生懸命植えるのか」とレポーターの問いに対して、彼女達は汗だらけの顔をあげて「彼女達ながら明るく、一生に一度くらいいいことをしてみたかったです。」

この市民の本能的ともいえる森づくりの願望に、ぜひ行政や企業・各団体の皆さんが舞台監督となり、すべての地域、すべての村、すべての町でいのちの森づくりを進めていってほしい。

死んだ材料の構造物とは違って、たとえ小さな幼苗でもエコロジの脚本に従って植えた木々は、時間とともにますます多様な防災環境保全機能を果たす。それは我々の時代、次の時代へと、より発達し、つながれていくは

すである。

2000年続いてきた日本のどこの町にも村にもあつた鎮守の森に象徴される本物のいのちの森、防災環境林づくりを都市域から過疎地まですべての地域で「一村一森運動」として、足元から共に、明るい未来を築くために皆さんですぐに計画し、はじめようではないか。

・連絡先/(財)国際生態学センター  
☎045(651)7690



▲▼活動前にシカの食害防止ネット張りの指導を受ける多摩川水源森林隊

# 東京の森を、元気に。

## 都民ボランティアが山仕事をサポート



東京都の最西部、奥多摩地域。東京都全域の一角を占めるこの地域を覆っているのは、広大な面積の山林だ。都民にとっては身近な観光地でもあり、貴重な水源林でもあるこの山々が、森の様相を変えはじめている。荒廃しつつある東京の森、水源の森を守ろうと、都民ボランティアの活動が活発になってきた。

◀東京都の広報を見てボランティアに参加している町田市の池田さん夫妻



### 林業不振の中で

東京を東西に貫く青梅街道が、武蔵野を過ぎ、立川、青梅を抜けると、街道の周辺は間際から直立するように切り立った急峻な山々に囲まれる。遠目には幾何学模様のように美しく、整然とした山林がどこまでも続く。「東京の森」奥多摩の山々は、しかし目をこらしてその山肌をじっと眺めていくと、間伐された木材が放置されたままの荒れた林や、間伐されずに密生し過ぎたスギやヒノキの暗い林相が目につく。人が入らず、手入れがされていないことが素人目にもみてとれる。東京の山林はもう見放されたのだろうか。一瞬そんな暗い気分が脳裏を掠める。

紅葉が針葉樹とのコントラストに映えて、美しく際立つ奥多摩の山。江戸時代以前は天然林がほとんどだったこの森は、江戸の町の繁栄にともなって、多くの薪炭を生産し、建築用にスギやヒノキの植林が始まった。昭和30年代に入り燃料が石油に代わると、薪炭の需要は激減し、建築材のスギやヒノキの需要が増え、人工林が広がっていった。スギやヒノキは日本人の住宅に欠かせない建築材として根付き、奥多摩の森はそうした暮らしと一体となった山として存在した。

### その森が荒廃している。

「森が荒れている一番の原因は、やっぱり林業の不振です」そう話すのは、奥多摩町役場観光産業課農林水産係の原島滋隆主査だ。奥多摩町（人口3718人）の山林は50%が人工林で、その80%以上が昭和20年から40年に植林された40年生以上のスギやヒノキ。伐採されれば十分に商品価値のある木材として利用できるものだ。しかし、安価な外国産材の輸入により国内の木材価格は10年前の三分の一まで下落した。木を伐ることが、必ずしも利益には結びつかないのだ。林業の世界には直径10cm、長さ10mの木三



## 森を学習・交流の場に

「適切な管理がされた森は間伐され、余分な枝も払われるため光が十分に入り、明るいです。本来こつした人工林は良質な木材を持続的に再生産できるばかりでなく、CO<sub>2</sub>吸着機能も広葉樹の森よりスギの若い人工林のほうが遙かに高く、地球温暖化防止にも十分役立っているんです」

「適切な管理がされた森は間伐され、余分な枝も払われるため光が十分に入り、明るいです。本来こつした人工林は良質な木材を持続的に再生産できるばかりでなく、CO<sub>2</sub>吸着機能も広葉樹の森よりスギの若い人工林のほうが遙かに高く、地球温暖化防止にも十分役立っているんです」

「山の中を歩いてみると、手入れが行なわれずに密生しすぎたスギの林や、間伐した木材が麓に運び出されることなく放置されたままの、荒れた惨状に改めて驚く。過密になった林内は地表に光が差し込まないため、表土を覆う下草が繁茂できず、雨が降るたび表土が流出。崩壊や土砂崩れの危険を孕み、森の持つ公益的な機能さえも危うくなっているという現状だ。また、伐採したままの木材は水害時に転げ落ちたり、沢をふさぐなど、二次災害も引き起こしかねない。」

### 暗い森、表土の流出

「植林された時期から40〜50年が経過し、丁度今が世代交代の時期なのですが、後継者の3割が都市部へ移住していますね。ここに住んでいても今や林業で食べていくのはほとんど不可能でしょう」

「そこにさらに追い打ちをかけるように、世代交代・後継者不足が続く。原島さんはいう。『植林された時期から40〜50年が経過し、丁度今が世代交代の時期なのですが、後継者の3割が都市部へ移住していますね。ここに住んでいても今や林業で食べていくのはほとんど不可能でしょう』」

「適切な管理がされた森は間伐され、余分な枝も払われるため光が十分に入り、明るいです。本来こつした人工林は良質な木材を持続的に再生産できるばかりでなく、CO<sub>2</sub>吸着機能も広葉樹の森よりスギの若い人工林のほうが遙かに高く、地球温暖化防止にも十分役立っているんです」

「適切な管理がされた森は間伐され、余分な枝も払われるため光が十分に入り、明るいです。本来こつした人工林は良質な木材を持続的に再生産できるばかりでなく、CO<sub>2</sub>吸着機能も広葉樹の森よりスギの若い人工林のほうが遙かに高く、地球温暖化防止にも十分役立っているんです」

「山の中を歩いてみると、手入れが行なわれずに密生しすぎたスギの林や、間伐した木材が麓に運び出されることなく放置されたままの、荒れた惨状に改めて驚く。過密になった林内は地表に光が差し込まないため、表土を覆う下草が繁茂できず、雨が降るたび表土が流出。崩壊や土砂崩れの危険を孕み、森の持つ公益的な機能さえも危うくなっているという現状だ。また、伐採したままの木材は水害時に転げ落ちたり、沢をふさぐなど、二次災害も引き起こしかねない。」

### 動きだした都民ボランティア

#### 水源の森を守る

「今やスギ・ヒノキといえば、花粉症という悪いイメージばかりが一人歩きしているが、スギやヒノキに問題があるのではなく、その山の手入れが出来ない、そのことこそが問題なのだ」と原島さんはいう。

「原島さん所有の森林面積は50ha。これはかなり恵まれた方で、3000人近い組合員がいる東京都森林組合員の半数以上が5ha未満の山林所有者だ。傾斜のきつい急峻な山での作業は、機械化も遅れ、人件費が高む。その労働力も高齢化が進み、森林組合に39人いる作業班の平均年齢は、70歳近いという。」

「適切な管理がされた森は間伐され、余分な枝も払われるため光が十分に入り、明るいです。本来こつした人工林は良質な木材を持続的に再生産できるばかりでなく、CO<sub>2</sub>吸着機能も広葉樹の森よりスギの若い人工林のほうが遙かに高く、地球温暖化防止にも十分役立っているんです」

「適切な管理がされた森は間伐され、余分な枝も払われるため光が十分に入り、明るいです。本来こつした人工林は良質な木材を持続的に再生産できるばかりでなく、CO<sub>2</sub>吸着機能も広葉樹の森よりスギの若い人工林のほうが遙かに高く、地球温暖化防止にも十分役立っているんです」

「山の中を歩いてみると、手入れが行なわれずに密生しすぎたスギの林や、間伐した木材が麓に運び出されることなく放置されたままの、荒れた惨状に改めて驚く。過密になった林内は地表に光が差し込まないため、表土を覆う下草が繁茂できず、雨が降るたび表土が流出。崩壊や土砂崩れの危険を孕み、森の持つ公益的な機能さえも危うくなっているという現状だ。また、伐採したままの木材は水害時に転げ落ちたり、沢をふさぐなど、二次災害も引き起こしかねない。」



右 / 間伐されず放置された林内は暗く下草も生えない  
左 / さまざまな森の活動に参加できる「体験の森」と奥多摩町都民の森課・山田彰さん

▼入山前にヘビやハチ等の注意を受ける



▲昨年植樹した小留浦水源の森の点検と下草刈り

▼ナタを使った高度技術をこなす女性メンバーも多い「森づくりフォーラム」



加工まで  
奥多摩産ログハウスは植林から

JR青梅線川井駅近く、多摩川支流の流れ

「湿気さえ気をつければ、木の家は一生ものです」と清水文治専務は胸を張る。植林から始まる奥森ハウスの生産体系は、木を知り尽くしたスペシャリストの多いこの町ならではの特殊性といえるだろう。東京都の試算では、奥多摩の山の木材を今後10年間伐採すると、約10万戸の住宅が建設可能だという。

大都市に隣接した奥多摩の森は、東京という大きな市場を控えた森でもある。豊かな森が地域の象徴だったこの町にとって、林業への新たな模索は常に大きな課題だ。町発注の公共施設は、可能な限り地場産材を使った木造建設としてきた。伐採した木の搬出費用に、助成金を出すことも新たに決定した。さらに出荷先も枠を広げ、地場産材の積極的な活用を、町は奨励していこうという気構えだ。

沿ってしゃれた住宅が点在する。奥森ハウス株式会社売り出した川井グリソヴィレッジだ。その中の一軒が鈴木明・よしえさんのログハウス。山の斜面を一望できる沢沿いに建てられた、風格のあるその家は、植栽から加工までを一貫したシステムで行なう奥森ハウス株式会社の自信作だ。

奥森ハウスは東京都森林組合の一部出資による生産・販売会社で、地元産の木材を使ったログハウスや一般住宅、公共施設を広く

観光資源、環境保全という森の機能がより充実していくためにも、林業が本来の健全なサイクルを取り戻していくことが、森の再生に繋がるのだと地域の人は考えている。

手つかずの大自然とは、対極にあるかもしれない林業の森。しかしその森は、人々の営みの中に根つき、暮らしの中で親しまれてきた身近で豊かな森だった。そんなかつての森が、再びこの東京の山々に甦る日を、都民の熱い視線が見守っている。

・奥多摩町観光産業課農林水産係  
☎04228(83)2111

・奥森ハウス(株)☎04228(83)3089

・東京都水道局多摩川水源森林隊  
☎04228(83)2045

文/金山淑子 カメラ/小林 恵



▶哲学をもって森と向き合う林業家原島幹典さん(右)と、森づくりフォーラムの地元窓口をする原島俊二さん(左)



▶奥森ハウスが売り出した家、木の香り溢れるログハウスの日々を楽しむ鈴木さん

森を学習・交流の場に

# 足尾銅山

「公害の原点」から  
「環境共生の発信地」へ

渡良瀬川最上流部に位置する栃木県上都賀郡足尾町。銅山が閉山し31年、過疎高齢化が進む町には、「負の遺産」と呼ばれる製錬所の煙害で森を失った広大な禿山が今も残る。禿山にはもう100年以上前から国と県で植林が行われているが、しかし豊かな森が蘇るには、さらに何百年という歳月が必要だという。近年、その足尾銅山の禿山を舞台に、公害の歴史の延長線上として「環境創造」を目指す人々の動きが活発だ。  
文・カメラ/石井雅義

足尾に緑を育てる会の植樹会は、今では700人以上の参加者が4000本の苗木を植えるまでに活動が広がった

▶平成8年5月、禿山に植木やスコップを持った人々が集まった。「足尾に緑を育てる会」の植樹活動がスタートした下/夏の草刈りデーに首都圏から小学生も多数参加

### 心に木を植えよう

「この広大な荒廃地のなかで、私たちの植林はどれだけ成果があるのかわからない。植えても枯れてしまうかもしれない。けれども足尾の大地に木を植えるということは、私たちの心に木を植えていることでもあるのです。」

今も緑戻らぬ禿山の真只中で、350人余りの参加者らは、たった今植えたばかりの苗木たちの頼りなく立ち並ぶ植林地を見上げながら、主催者の希望と絶望の入り交じったスピーチに聞き入っていた。これは足尾銅山で、平成7年より始められた市民ボランティア「足尾に緑を育てる会」の植樹活動の、3年目の春の植樹会での光景だ。この草木の死に絶えた大地に、市民たちの手で本当に植えた木が根づくのか、大きな不安を抱えながらその



後も毎年植樹活動は地道に続けられてきた。活動の始まる前は、石ころばかりが転がるしんと静まり返っていた大畑沢の荒廃地。それが植樹を続けて8年、今では、訪れるたびに大きくなっている木々のさわやかな緑が皆の心を励まし、また以前は聞かれなかった野鳥のさえずりが耳に優しく語りかけてくる。

草地ではトンボやチョウが飛び交い、コガネ虫は一心に花の蜜を吸い続けている。夏の草刈りの日、旺盛に伸びた下草をかき分けてみると、そこには可愛らしいウグイスの巣が…。荒廃地のなかではほんの狭い一角ではあるけれども、この大畑沢の植樹地は、市民らの力によって森のはじまりの第一歩を踏み出したのである。

### 怨念を越えて

足尾銅山の緑の再生を市民の力で試みる



▲緑化の進んだ大畑沢では最近鳥や昆虫がよく見られるようになった



▲共催団体「渡良瀬川にサケを放す会」では下流域で昭和57年よりサケの放流を続けている

「足尾に緑を育てる会」は、足尾町と渡良瀬川下流域のそれぞれの市民活動グループの長年の交流が実り結成されたものだ。

それ以前から「足尾鉱毒」の被害地を拠点とする渡良瀬川下流域の市民グループは、公害の教訓を現代へ伝えてゆこうと活動を展開し、また足尾町の市民グループは、閉山後過疎高齢化の進む町の行く末を案じ、その振興策を模索する活動を続けてきた。両者はそれぞれ草の根的な活動を続けながらも「現代にとって足尾とは」という共通のテーマのもとに集い、意見を交わし、時にはイベントを共催してきた。その長年の



▲山肌を平らに削り並べられた「植生土のう」から芽を出す草。地面からは雑草も生えてこない



▲緑化工事は国と県で100年以上前から実施、草の種の入ったシートを山肌に張り付ける



上 / 足尾に緑を育てる会、会長の神山英昭氏  
下 / 足尾砂防出張所鶴巻和芳所長



### 民と官 同じ願いのもとに

足尾の山々は、過去70年以上もの間製錬所からの亜硫酸ガスを浴び続けたために緑を失い、表土は流され地層は露出し、生態系本来

交流が、足尾に木を植えるというアクションへと繋がったのである。  
人々の中には、鉱毒根絶を訴え田中正造とともに闘った祖先を持つ者もいれば、谷中村の消滅とともに一家が離散してしまった祖先を持つ者もいる。足尾町の人とて、暗く重すぎる公害の歴史と、「負の遺産」禿山の痛々しい風景を背負って生きてゆかねばならない。公害による人々の心の傷は、今でも決して癒されてはいないのだ。しかし人々はそれぞれの思いを後世へ伝えるために、力を合わせて木を植える。森を育てることで、環境のかけがえのなさを現代に訴える。その公害の怨念を越えた植樹活動は大きな共感を呼び、今では渡良瀬川流域を越えたあらゆる人々へ「現代にとって足尾とは何か」と問いかけながら、肌で感じることでできる貴重な体験学習の場を提供している。

の還元力までも絶たれてしまった。だから栄養が無く酸性化した山肌へそのまま木を植えようとしても、まず確実に根付かない。それほどばかりか、岩盤の風化による落石も多く、作業そのものが危険ですらある。

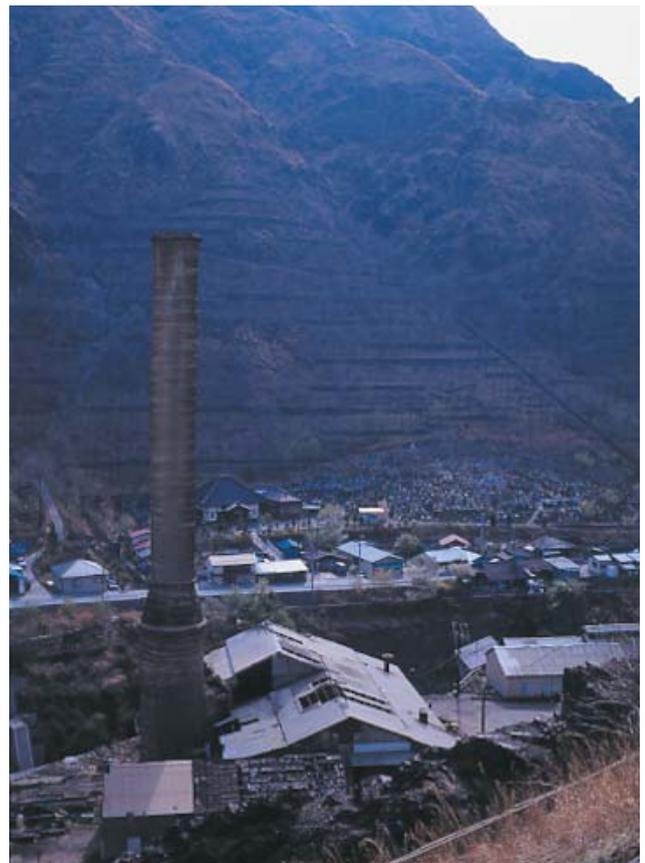
この過酷な環境で「足尾に緑を育てる会」が植樹活動を続けてゆくには、営林署や植林業者、また緑化の専門家や研究者らの協力が欠かせない。そのなかでも大きいのが国土交通省との提携だ。国土交通省渡良瀬川事務所足尾砂防出張所では、「足尾に緑を育てる会」の参加者の増加とともに毎年広がり続ける植樹地を、市民らがより安全に植樹が出来るよう事前に基盤整備工事をするなど、全面的なバックアップを続けている。その支援には、「足尾砂防出張所の所員らの、「足尾」という特別な土地での業務に対する大きな熱意が込められている。

足尾砂防出張所では平成5年度より、砂防事業への広報活動の一環として、小中学校をはじめ一般市民の体験植樹の申し込みを受け入れてきた。

「私が最初足尾を訪れた時、これが本当に日本か！と大変な衝撃を受けました。そう誰もが感じるインパクトが足尾にはあります。」と語る出張所所長鶴巻和芳氏(43)は、平成12年に就任以降、この市民の体験植樹をまたとない総合環境学習の場として位置付け、その充実に力を注いでいる。小学校の体験植樹では、まず事前に学校へ資料を送り足尾の公害について予習をもらう。そして現地では荒廃地を見渡しながら、森が失われた因果関係、砂防の必要性や環境共生の大切さをレクチャーする。それから木を植える作業により環境破壊の現場を肌で感じてもらい、その後も学校へ帰ってから感想文やアンケートを



▲上 / 煙害で緑を失った松木沢の山肌。木の根だけが残り下 / 一度雨が降ると地表がむき出しの山から土砂が流れ高さ2mの橋を埋めることもある  
▶ 足尾銅山製錬所跡は放置され、お年寄りの住む家が残った



書いて送ってもらう。「子供たちの木を植えることによる心の成長が分かるのがとても嬉しい。公共事業でこれだけやりがいのある職場はそうないでしょう。」

この体験植樹は口コミで広まるとともに足尾に緑を育てる会の植樹活動への共感も重なり、毎年うなぎ上りに申し込みが増え続け、

▼煙害の最も著しい渡良瀬川最上流の松木溪谷は、公害の象徴として一部を緑化せず残すことが決まった



### 環境創造の町へ向けて

足尾町では、銅山閉山とともに過疎高齢化が進み、昭和48年の閉山時には8699人であった人口も現在では3521人にまで減り、そのうち65歳以上の高齢者の比率が40%を越える。

そんな中、「足尾に緑を育てる会」会長神山英昭さん(66)は、「過疎高齢化の進む町で、数限られた若者たちばかり期待している、負担を増やすばかりでかわいそう。その分、定年後の時間に余裕のある中高年のがんばりが町にとっては必要」という。事実、元気な活動を支えるスタッフのほとんどが中高年だ。若者も増やしたいのではという質問には「近視眼的でなく、広い視野で息の長い

活動をすれば、次世代へ自然と引き継いでゆけるはず。そのために今われわれがやるべきことをやる」という答えが頼もしい。

行政では以前から、町全体を歴史博物館化する「エコ・ミュージアム構想」を掲げているが、財政的な困難も続き、ようやく産業遺産の各所に小さな案内板が設置された程度。毎年一万人近くが訪れる修学旅行者への宿泊や研修施設の整備も進んでいるとはいえない。他に具体的な活性化への振興策もなく、過疎高齢化に歯止めがかからないというのが町の現実だ。

一方同じ「環境創造」を掲げながら、市民ボランティア「足尾に緑を育てる会」の活動と、それと提携しながらの国土交通省足尾砂防出張所の体験植樹は、閉塞感漂う行政とは対照的に、環境の時代の追い風に乗りながら、毎年実に多くの人々を足尾へと呼び寄せている。民・官・行政が同じ「環境創造」という理念のもとに一体となり力を合わせれば、そこから「公害の町足尾」から「環境共生の発信地、足尾」として、町全体をも巻き込んだ本当の活性化がはじまると期待したい。

・足尾に緑を育てる会 ☎0288(93)2180  
・渡良瀬川河川事務所足尾砂防出張所

☎0288(93)2151



▲建て替えが進む銅山長家社宅  
◀粘土団子から収穫した大根を喜ぶ

平成15年では小中学生から成人まで89団体、5027人が体験植樹した。所員総出で万全の体制で対応するため、通常の業務が止まってしまふこともしばしばだ。また、行政機関の研修会で足尾を訪れた人々へも、体験植樹を日程に組み込むよう勧めているという。「木を植えてもらえば、絶対に足尾のことを忘れないから。」と熱く語る鶴巻所長の言葉は印象的だ。

足尾砂防出張所では、平成14年から「足尾に緑を育てる会」がNPO法人化したことを受けて体験植樹の業務委託を依頼し、また「足尾に緑を育てる会」では、樹木の勉強会を開き体験植樹スタッフの育成をはかるなど、両者は環境保全を訴えるという同じ目的のもとに連携を強めている。

平成15年度 **ビデオ完成!**



「豊かな自然、伝統文化等の地域資源を生かした観光地」をテーマに、福岡県の南部に位置し、山地にある2つの村における、かけがえのない自然環境を大切に守りながら、都市との交流を進める村の人たちの活気ある姿を紹介しました。

星の里・星野村 / ふるさとの緑側で都会の人をもてなす

杣の里・矢部村 / 都会人に贈る秘境の宝もの  
この作品を多くの方々にご覧いただいて、ぜひ、星の里、杣の里を訪れて自然や暖かい村の人たちとのふれあいを楽しんでいただきたいと願ひ制作しました。

なお、このビデオは全国のCATVで放映される予定です。

製作・著作 / 社団法人日本観光協会

「全国広域観光振興事業」

企画・監修 / 全国過疎地域自立促進連盟

制作 / 桜映画社

編集後記

ブナ林が好きで、かつてブナ樹林があったという場所を10数年来全国各地へ訪ねている。残念ながら里に近い場所はほぼ全滅。奥地も大半が人手が入り原生林の形態を失っていた。白神には毎年行っていたが、世界遺産指定で観光客が多くなり会いたかった樹は元気がなく、樹々たちと会話をしむ雰囲気はない。森林への市民の関心が高まることは結構だが、原生林や生態系保護林の入山や観光化には慎重を期し一定の規制もして欲しい。

日本人はなぜ桜が好きで、山の中まで桜を植えたがる。信州の山の中の小さな湖は、近くに宿舎が出来たのを機に、広葉樹は湖面を落葉が汚すからとすべてを伐採、芝生にして住民の寄付で桜を植えた。木には「病床の母に捧ぐ 子」といった板切れが全部についている。神秘的な森と湖は消え人間臭い広場に変身した。ブナで観光化しているある村でも最近ブナではなく子供たちの名札をつけた桜並木を新設した。宮脇昭先生が「ふるさとの木によるふるさとの森づくり」を提案している。自然林と手入れされたスギやヒノキ林、そして地域の森、これらが繋がって真に豊かな森林体系が確立、野生動物も共生していけるのではないかと思う(A&T)

De POLA No.26

[ でぼら ] 2004年春夏号

発行日 / 平成16年3月5日

発行所 / 財団法人過疎地域問題調査会

〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-1-24

オカモトヤビル8階

☎03-3580-3070 FAX03-3580-3602

http://www.kaso-net.or.jp/

編集協力・印刷 / 株式会社ぎょうせい

編集工房アド・エー

森を学習・交流の場に



北限のブナ自生林  
「歌オブナ林」北海道黒松内町

歌オブナ林は、ブナ自生北限地帯「黒松内低地帯」の中央に位置し、標高40〜160mの朱大川左岸の丘陵地斜面92・43haにあり、樹齢150年以上のブナが約1万本自生している。地衣類の模様がついた白っぽい幹に緑の葉をたっぷり茂らせたブナは、雪深い長い冬を乗り越え

てきた樹ならではの感動にあふれ、中には樹齢200年以上のブナの大木や直径2mのミズナラの巨木も自生している。また、多雪地帯の森としての特長を形成しており、ハイイヌガヤ、ヒメモチ等の地を這う常緑低木が多く、林床はクマイザサが生え、トドマツやエゾアジサイ、トリアシシヨウ等の北海道特有の植物が混生している。

ブナ林は本州から海を渡って渡島半島に広く分布したが、明治以降の開拓でその殆どが伐採された。大正12年に北海道大学の新島教授らの保護活動により、昭和3年に国の天然記念物に指定された。その後も何度か伐採の危機があったが、学者や地元住民の熱心な運動で今日まで原生的な森林として保全されている。ブナ林の周辺にはブナセンター、歌オ自然の家、ミニビジターセンターがあり、青少年の森林学習・研修の場になっている。北海道観光の折にはぜひ訪ねてみたい。

黒松内町役場企画調整課  
☎0136(72)3311

「森を貸します」  
福島県只見町 たもかく(株)

たもかく(只見町木工加工共同組合)では早くから雑木林や里山を都市の人に分譲したり交流活動を行ってきたが、都会人の出資により放置している雑木林を買収し入会権を分譲する制度では、8年間に520人が株主となり出資金は1億4000万円、買収森林は40万坪になった。これらの森は株主以外の人も20年間の入会権と管理料のセットで販売されている。いらぬ本を定価の1割で引き取り1坪の森と交換するユニークな試みも3年間で80万冊の本が集まり、3万坪の土地と交換した。会員になると森は、自分の森として好きな時に好きなように利用できるが、下草刈り等して手入れする人が多く、町の森林保全事業の活性剤にもなっているようだ。(たもかく株)

林業で働きたい人は  
各県の林業労働力確保支援センターへ

かつては3K(つらい、汚い、危険)といわれた林業の作業だが、近年はコンピュータを駆使した高性能林業機器でつらい作業から解放され、安全で効率が高くなった。雇用状況も、年間を通じての採用が増え、賃金も本採用になると役場職員に準ずる給与で各種保険にも加入、週40時間(週休2日制)も定着している。

体力に自信があり、林業に関心を持ち田舎や自然で暮らしたい人は、希望する県や町村へ気軽にお問い合わせを。林業労働力確保支援センターは全国森林組合連合会内にあり、各県ごとに林業担い手育成窓口を設置している。北海道は(社)北海道造林協会、青森県は(財)青い森振興公社、岩手県は(財)岩手県林業労働対策基金と名称が県毎に異なるため、問い合わせは東京

の本部・林業労働力支援全国センターへ。  
☎03(3294)9719

フェアに参加して情報を

I・Uターンして森林作業に従事した人の多くが「E・Uターンフェア」や「グリーンフェア」等に出かけて情報を得ている。全国森林組合連合会では昨年第1回「森林へ行こう2003」を開催、森林に関する各県の情報コーナーや間伐材を使った家や木製品の展示等を行い好評を博した。今年のフェア開催は未定。

木や間伐材を活用しよう

日本の林業を発展させるためには、国産の木の家、木製品の活用が求められる。間伐材を使った住宅関連用品や道路や河川でコンクリートに替わる建築材として丸太の人氣が出てきている。

問い合わせは全国森林組合連合会  
☎03(3294)9711

# カンジンなのは カンキンですよ。

当たりくじ

宝くじ

買ったから調べて早めに換金。

宝くじの収益金は、  
身近な街づくりに役立っています。

宝くじ



財団  
法人

日本宝くじ協会

宝くじのホームページ

<http://www.takarakuji.nippon-net.ne.jp>

●外国発行の宝くじを、日本国内において購入することは、法律で禁止されています。